

「巻き込まれ親父の鎮魂」

作 藤次郎政秀

●プロローグ、「金のない奴あ、俺んどこへ来い！…じゃないんだけどね」

「俺は、今無職でしかもあまり金が無い…ここで、こいつ（退職届）を出したら、後戻りはできんぞ！」

脅かすように言うHGにIYは

「私の決意は変わりません！」

とIYはHGを睨みつけるように答えた。

HGはIF達と共に、F県領地からの長距離夜行列車で帝都の駅に降り立つと、列車車中で退職届を書き上げたIYをIFに委ねて、HGは民兵会社DK本部の近所にある喫茶店にHYと共に入った。

IYが退職届を会社社長に提出して退職手続きを行っている間、HGはHYに自分についてきた理由について詰問していた。

HYは「IYが突然会社を辞めてHGに弟子入りすると言い出したので、心配になり、ついてきた」との一点張り…困ったHGは何とかれて、最低どちらかを追い返そうと考えた。

そこで、ふとHGはHYの顔を見て思い出し、

「そういや、お前車どうするの？F県領地の駐車場に置いたままだろ」

「向こう（F県領地）を立つ前に、駐車場の地図と鍵を入れた封筒を実家に郵送しました」とHYはそっぽを向いて答えた。「（この手はダメか…）」とHGは項垂れた。

やがて、IFが私服に着替えたIYを連れてHGの居る喫茶店に来た。

「待たせたわね」

IFとIYが席に着くや否やHGは

「大分、時間がかかったが、揉めた？」

と心配顔をして言った。I FはH Gの心中を察して、

「いや…F県領地の報告で時間が取られたわ…I Yの話はその後…」

「ふーん、社長はなんと？」

「なんか、嫌そうだったけど…I Yが『この度前線に出て、この仕事やっていく自信が無くなりました』と言ったら、納得してくれたわ」

「どの辺で？」

「斥候（赤ずきんちゃん作戦の事。「まきこまれ親父の撤退」参照）に出て緊張のあまり、林の中で気を失った…と言う事にして報告したわ。ホントはシェリー酒あおって、酔っ払って気を失っただけだね」

それを聞いて、H GとH Yは苦笑した。それを見てI Yは膨れた。H GはI Yを見て

「I Y」

「はい」

「S Sにはちゃんと挨拶した？」

S SはI Yの上官である。S SとH Gは仲が悪い。それで、H GはI YがS Sの所を去る事に関して、禍根を作りたいはなかった…I Fもそのことは十分承知しているので、F県領地の事件にH Gが関わっていたことを会社に報告していないし、Y Mや部下達に口止めをしていた…（いずれバレると思うけど。作者）

「はい」

「で、奴はなんと？」

『あつ、そう。それじゃあねえーフハハハ！』と、あつさり

「ハハハ、奴らしい」

H Gは笑うと、向かいの席で黙っているH Yに対して

「それじゃあ、行こうか。この街にはあまりいい思い出もないし…なあ、H Y？」

「そうですね」

H Yは暗く落ち込んだ表情で返事をした。

「元気でね。I Y」

席を立つI Yに対して、I Fが手を上げると、

「はい、隊長にはお世話になりました」

I YはI Fに深く頭を下げた。

●Y 国際港町

H G達は帝都に隣接する港湾都市のB県領地Y市のY 国際港町駅に降り立った。

H G達は駅前のロータリーを挟んだ商店街の入り口にある「ミルクホール白山亭」と看板がある古い店の前に立ち止まった。

「ここが、俺の家だ」

「ずいぶん年季の入った店ですね」

I Yは店の建物を眺めながら言った。

「准尉の実家はレストランか喫茶店かなにかですか？」

実家が本屋のH Yは建物を見上げて言った。

「ここは、俺のひいお婆さんが建てた店でね、その当時はミルクホールとか言っつて、いわば女給喫茶店なんだけど、お婆さんの代で閉店して、その建物を俺が譲り受けたんだ」

「へー、ではここの営業とかは？」

とH Yが訊ねると、H Gは

「いや、お婆さんが亡くなって廃業し、長いこと空き店舗になっている。住まいはこの裏…ちなみに俺の実家は帝都にあるよ」

と答えた。

「そうなんですね」

I Yは分かったような、分からないような返事をした。

「うん…で、住居の入り口はこっち」

と言って、H Gは店の横の小さな木戸口を指した。入ろうと木戸の取っ手に触れた時、ふと思いついて手を止めた。その光景を不思議そうに見つめるH YとI Yの二人に向き直り、

「そういえば、まだ昼の食事をしていなかったな…どこか食べに行こうか」

と言った。H Gの言葉にH YとI Yは無言で頷いた。

駅前の洋食屋。H Gがドアを開けるなり

「いらつしやい！…あれ？H G、旅行から帰ったの？」

と、この店のシェフ兼オーナーから厨房のあるカウンター越しの声をかけられた。

「ああ、今帰ったとこ…ささ、入って」

とH Gに促されてH YとI Yが入って来たのを見とがめ、

「あれーH G、旅先でナンパかよ！…お安くないねえ」

と冷やかされた。それを意に介さず

「まあ、そんなとこ。奥空いてる？」

H Gはとぼけた返事をした。

「はい、どうぞ」

と言って、オーナーは奥の別室のドアを指した。

席に着くと、H Gは二人に

「さあ、好きなモノ頼みな…と言っても、高いものは懷が辛いけど…」

と苦笑いしながらテーブルのメニューを二人に渡す。

一通り、注文が終わると。

「ゴメンね、家に入る前にちょっと確認しておきたいのだけど…」

と前置きして向かいに座っているH YとI Yに身を乗り出す。そして、

「君達 “見える人”？」

と唐突に訊ねた。二人は何のことか分からずお互いに顔を見合わせていた。二人とも、H Gの家に来るのに別の覚悟が居るのかと変な方向の想像をしていた。

「なんですか？その “見える人” って」

H Yが聞き返す。H Gは「あっ…そうか」と合点して、

「実は、これから話すことについて他言無用と言う事と、話を聞いて気が変わったなら、旅館なり手配するけど…いいかい？」

と勿体ぶったような口調で言うH Gに対して二人はよくわからないけど、なにか大変な話があると覚悟を決めた。

「はい、他言無用ですね」「はい、他には言いません」と返事をした。

●白山亭の歴史

「なら、話をするけど…」

とH Gはさつき入ろうとした自宅について話をした。

H Gの現在の自宅は、先程H YとI Yが見た表通りのミルクホール白山亭の裏手にある “母屋” と呼ばれる建屋に当たる。

かつてH Gの曾祖母がミルクホール白山亭を営業していた頃、そこには常に20人程度の女給が母屋に住み込みで働いていた。

表の店名は “ミルクホール白山亭” という名称であるが、裏の看板は “碓屋” という屋

号で通っていた。「碇屋」とは、Y 国際港に来る船乗りを主に相手にしている娼館の屋号のことで、「ミルクホール白山亭」の一部の女給達の別の仕事である。

後に碇屋は女性の地位・権利向上を目的とした法律に基づく赤線取り締まりにより廃業。以後、ミルクホール白山亭は女給喫茶店として祖母の代まで続いたが、老齢と港の拡張工事により、Y 国際港が遠くに移転したことで、駅前からバスで Y 国際港に行くようになり、Y 国際港駅前の商店街の衰えと共に廃れて廃業した。

祖母の長男：H G の父親と結婚した母親が、度々母屋で幽霊を見て（母親とその家系は霊が視える人）気が狂いそうになり、父と家を出て、以後祖母は父の妹夫婦と暮らしていた。

H G の母親の話では、幽霊は母屋で亡くなった女給達らしい…

祖母が亡くなり、叔母はこの家と土地を何度も売ろうとしたが、その都度正体不明の出来事が続き、売ろうにも売れなくなった。そうして居る内に叔父が亡くなり、そして叔母が長期入院する事になり、二人の間に子供が無かったので、仕方なく H G にこの建屋と土地を譲渡した。

「それでは、あの建物は…事故物件？」

H G の話を聞いた H Y が訊ねると

「そう」

と H G が頷いた。今度は I Y が

「准尉は視えないのですか？」

と訊ねると、H G は

「俺は…不思議と視えないんだ…母親方の人は殆ど視える人で、兄も視える人だけど、俺は父親方の血が濃いせいか視えない人でねえ…ただまれに何か居ると感じる事がある。ある夜寝室で寝ていたら、何者かが俺の顔を覗き込んでいる気配がしてね…目を開けたらまずいと感じただけど、気配の主はただ頭の上から覗き込んで居る様な気がするだけで、何も

しない…その内子守唄らしき声が聞こえてきた…」

としみじみ答えた。

「ヒィ！」

H Yは、椅子の背もたれに手を回して怯えた。H Gは「（しめた、これでH Yは脱落かなあ…）」と思った。

「でも、それくらいだよ…俺があのだ建屋の主の孫とわかって、あやしに来ているのかもしれない…子供の頃、度々父親に連れられて来た時や、母親の長期入院で預けられた時に当時ここで働いていた女給さんたちに遊んでもらったり、お菓子もらったりしていたから、悪い人たちではないと思う。ここに住んでもう20数年近く経つけど、特段怪異が起こったためしがない」

H Gは話が終わると、H YとI Yに対して、

「で、この話を聞いて、どう？」

「いつ、いやあ…『どう？』と言われましても」

とH Yは蒼くなって口を濁した。

「あつ、私はそういう意味では“見える人”ですね」

とI Yはあっけらかんと答えた。

「エッ？」

驚いたH YがI Yの方を見る。I Yは続けて

「…実は、私の実家は帝都にあるB家と言って、御殿山にあるのですけど…」

「御殿山のB家って、あの貴族階級のこと？」

今度はH Gが驚いて聞いた。

「はい、その私の実家ではよく昔の内乱で犠牲になったご先祖様とか邸内で死亡した使用人や暗殺者の亡霊とかよく見ましたから…」

とIYはあつさりと言った。HGは「(やべー、うちよりハイレベル...)」と思って、背筋がゾツとした。

「大丈夫ですよ、准尉。今の話では悪霊とか亡霊の類ではないようですし、実はさつき准尉の店の中でそれらしき人を店内に何人か見かけましたから」

「マジッ！」

HYは驚いて言った。

「はい、みなさん楽しそうに店内で働いていました。それから、お客さんらしき人も居ましたけど、皆さん楽しそうでした」

「へえー、まだあの店はある意味営業してるんだ」

とHGは感慨深げに言った。それを聞いてHYは、

「わっ…私は旅館の手配をお願いします」

と震えた口調で言った。その時に、注文した料理が運ばれてきた。

食事をしながら、もっぱらHGの関心はIYの事であった。IYの実家は侯爵の家柄で、

IY自身は長女だが庶子であり、母親の病死とともにB家に引き取られたとの事。Iの家名は母方の家名。

生まれつきの左耳の難聴のせいで貴族のたしなみである音楽とか唱とかがダメで、また学校ではヒヤリングの成績が悪かった。それゆえ、一族の落ちこぼれとされ疎外されていた。またB家の正妻には既に男子が居るので、家督を継ぐ権利がないため、大学卒業後IYの旧姓に戻され、家を出されたとの事。そのため彼女は自分の生きる価値が見いだせなくなり、死に場所を得ようと民兵会社に入ったとの事等…身の上話をしてくれた。

「(…どうりで、IYの食事の仕方に品がある)」とHGは思った。

食後のデザートを食べながら、今までのIYの話を聞いて、HYは

「わっ…私も、やっぱり准尉の家にお邪魔します！」

と上ずった声で言った。

「おい、H Y。顔色が悪いぞ」

と心配するH Gに対して

「大丈夫です…たぶん」

とH Yは引きつった顔をして答えた。H Gは素直じゃないH Yに「こいつ、新入社員時代から、なんか意固地になることがあるよな…それに、当時から何かをひた隠しにしている、自分の事話さないし…I Yの様に素直に話してくれると有難いのだが…」と思った。

● 白山亭母屋

食事が終わり、勘定を済まして再度H Gの家に向かった。

「んじゃ、各々方覚悟はいいな？」

と言って、H G達は店の横の小さな木戸口を潜り、母屋の住居側の玄関を開けると。

「あつ、おじさんおかえりー」

と若い女性の声がして、奥からI Yと同世代位の女性が出てきた。それを見てH YとI Yは勇んでいた気が一気に抜けた。「（人が住んでいたんだ！）」

「あれ？お客さん？」

その女性はH YとI Yを見て言った。H Gは女性をH Y達に紹介した。

「ああ、紹介するよ。この娘は俺の姪H Mだ。こちらは、俺の前に居た会社の教え子。今日からここに寝泊まりする」

「H Yです。准尉…いえ、おじさんにはお世話になりました」

「I Yです。よろしく願います」

と挨拶した。

「こちらこそ…叔父がご迷惑をおかけしております」

H Mは笑いながら言う。

「なにを言う」

H GはH Mにむきになる。H MはH Gを無視して、

「まあ、玄関口で何ですからおあがりください」

と言った。

H Mが母屋の奥に行くと、

「准尉、あの子は…」

H YがH Gの袖を引っ張って訊ねる、

「あれは、この近くにある港町総合病院で看護師をしていて、近いからここに住んで通っているんだ」

H Yが訊きたいのは、その事よりも肝心な話が訊きたくて、

「そうなんですか…で、彼女は“見える人”？」

と訊ねると、

「あれは、俺より鈍いらしい」

と言って、H Gは力かと笑った。H Gは玄関に自分の荷物を置くと、

「部屋は2階の部屋を使ってくれ、案内する」

と言った。

H Gに従い、H YとI Yは母屋の2階に上がる。階段から廻り廊下を歩きながら、

「こっちの部屋は姪のH Mが今使っているのと、その手前にある隣の部屋はH Mの同僚の看護師達の仮眠場所やたまり場になってる…なので、二人の部屋は、この廻り廊下を行った先の…このこと、ここ…一部屋ずつ使っているよ」

と言って、H Gは部屋の障子を開ける。そこは8畳の畳部屋…隣の部屋とは襖で隔てて居るだけ…押し入れや物入れもない。

「あと、布団とリネン類はさっき階段を上がった正面の部屋にあるから好きな柄を選んで持って行ってくれ、トイレと洗面所はこの廻り廊下のさらに先か、あるいは今登ってきた階段の踊り場から来た逆方向…あと、3階にもあるけど、3階は誰も居ない」

とHGは指さして言った。

「…あと」

とHGは言って暫く思索した後、

「長旅で疲れているだろう…ゆつくり風呂に浸かって…と言いたいところなんだけど…」

HGは「困った」と言う顔をした。そして

「実は、この家の風呂は今使えないんだ…」

「「c」」

「この家の1階に風呂場があって、本来なら24時間使えるようになっていたのだが、風呂にお湯を供給するボイラーが使えなくて…いや、ウチの誰もボイラーを使えないので、この向かいにある別棟の建物の中にある狭い風呂か、近所の風呂屋に行っているんだ…」

「そうですか…」

「あっ！でも、風呂屋でタオルを貸してもらったり、石鹸・シャンプー・リンスはあるし、それに天然温泉だし…美肌効果もあるし…」

「「天然温泉！美肌効果！…」」

HYとIYの目が輝く。それを見て、HGは

「じゃ、温泉に行こうか、鉱泉の沸かし湯なんだけどね」

と言ったが、HY達は「それでいいです」と答えた。

「荷物を置いて、布団を運び込んだら風呂に行く支度をして下に降りてきて」
と言ってHGは階段を下りていった。

「はい」「ハイ！」

と返事をしたものの、二人ともF県領地からほぼ手ぶら状態でHGについてきたので、HYはIYに

「どうする?」

「えっ?どうするって…先輩?」

驚いて聞き返すIYに

「私達、手ぶらよね?」

「そうですね」

「身の回りのモノ買わないと」

「あっ…」

IYはなにも考えてなかった。IYの手荷物はF県領地で使用した“赤ずきんちゃん作戦”の衣装(「巻き込まれ親父の撤退」参照)とF県領地の事件時に着用していたインナーとかの下着類と退職時に会社から持ってきた私物…HYに至っては、着の身着のままの完全到手ぶら…

「買い物に行くにしても、准尉に案内してもらうのはチョット…」

とHYが上目づかいで言うと、IYも赤面して

「そうですね…恥ずかしいですね」

「HMさんに話してみる?」

「そうしよう」

HYとIYは、取り敢えずHGに言われた部屋から布団を割り当てられた部屋に運び込む。それから、財布の中身を確認して下の居間にいるHMの所に行った。

「どうしました?」

HMは二人を見て訝しげに聞いた。

「…実は…」

二人は、手ぶらでH Gの所に来たことを正直に話した。それを聞いたH Mは

「まあ、大変！すぐに買い物に行きましょう！私、今日この後夜勤だから」

「お願いします」

「おじさん、私ちよつとこの人達と買い物行ってくるねー」

と、H Mが奥に居るであろうH Gに言うと、H Gが「わかった！お前今日夜勤だろ？それま
では帰ってこい」と言った（食堂にホワイトボードがあり、お互いのスケジュールを書い
てあります。作者注）。

H Mの案内で二人は商店街に行き、必要なモノを買い込むことができた。また、商店街が
駅前のロータリーだけではなく、港に続くメインストリートとそれに平行する裏通りにも
ある事をH Mに教えて貰った。

帰り道、H Mは二人に対して

「今日から、家に寝泊まりするとおじさんが言っていましたけど…なぜですか？」

と質問された。H YとI Yはお互い顔を見合わせて、I Yが

「私達は、あなたのおじさんの弟子になりました」

と答えると、H Mはキョトンとして

「どうして、おじさんに弟子入りしたんですか？」

と素朴な疑問を投げかけられた。H YとI Yは一瞬戸惑ったが、今度はH Yが

「H Mさん」

「はい」

「あなた、昨日までF県領地で事件があったこと知らない？」

「はい、知ってますよ。テレビのニュースやワイドショーで報道されていましたから」

「あの…わたし達、あなたのおじさんとそのF県領地に居たの」

「ええ…おじさん先週から学生時代に住んでいたF県領地に旅行に行くって言っていまし

た。それで？」

「…最初挨拶したようにわたし達、准尉…いえおじさんの居た会社でおじさんから教育・訓練受けていたのよ」

「では、向こう（F県領地）で再会したのですね」

と訊ねられ、HYは困って、

「…うーん、そうなんだけど…F県領地で事件（「巻き込まれ親父の撤退」参照）に巻き込まれて…そのなんていうか…事件前に私達は会社の任務でF県領地に派遣されて…そうしたらあの事件に巻き込まれて移動している最中に、偶然あなたのおじさんと再会して、おじさんの機転であそこ（F県領地）から逃げる事ができたの…それで、おじさんの事を尊敬してもっと色々教えて貰おうと思って、二人で会社を辞めてついてきちゃったの…」

HYがF県領地での話を端折って説明した。それを聞いてIYは「（HY先輩…自分に都合の悪いとこ全部抜いて端折り過ぎ…）」と苦笑いして突っ込んでいた。

「ええっ？だって、おじさん今無職ですよ」

HMが驚いて、二人に言う…HYは

「それは、本人からも言われました。それでも、私達はこんな師匠は二度と出会えないと思って、押し掛けて来たの」

「へーえ、あのおじさんがねえ…」

呆れ顔でHMは言った。

HM達が母屋に戻り、HYとIYが一旦自室に買い物の荷物を置いて、風呂屋に行く準備をしてHGの部屋に入ると、HGは背広やシャツ等をトートバッグに入れていた。縁側には広げられた新聞紙の上に細かい部品まで分解された愛銃が置いてあった。それを見たIYは「（あっ！）」と思った。

「准尉、愛銃…」

とI Yが恐る恐る訊ねると、

「ああ…糖分が固着して動かなかったから、お湯につけて糖分を溶かして分解した…ほら」
と言って、H Gはちやぶ台上の灰皿の横にある空薬莢を顎で示した。

それを見たI Yは「自分がシェリー酒をかけてしまい、その糖分が固着するところまで分解掃除しないといけないのね…」「巻き込まれ親父の撤退」参照」と反省した。

●風呂屋

H Gに連れられて、H YとI Yは風呂屋に行った。途中、H Gは背広やワイシャツ、ネクタイをクリーニングに出していた。

風呂屋の入り口で男女それぞれ別れて風呂場に入る。

壁の温泉についての説明書きを読むと、確かに『鉱泉の沸かし湯』とあった。また効能は『美肌・癒し』とあった。浴槽の湯は確かに道すがらH Gの言った通り黒いヌルヌルした湯であった。H Y達は掛け湯をし、体を洗い戦場と旅の垢を落して、湯船に浸かると、I Yはその開放感から

「あー、お風呂に浸かるのは何日ぶりですかね？先輩」

「そうね…F県領地を引き上げて以来かしら」

「私は、事件前日から風呂に入っています」

「あら、そう…私は准尉とT Tと事件当日温泉に入ったわ」
なぜかH Yがどや顔で言うのと、

「えー、羨ましい！」

I Yは悔しそうに答える。

「…そういえば…私達、F県領地の事件で現地を駆け回り、ロクに風呂も入れず汗臭くなっ

ていたわね…」

「…そうですね。私なんか更に酒臭くなっていましたね（「巻き込まれ親父の撤退」参照）」

I Yが自虐気味に言うと、

「そうね」

H Yが笑う。

「先輩！チョット…」

I Yはムキになったが、お互い生還した事を実感し笑い出した。

「…と言う事は、准尉は親父臭くて煙草臭くて汗臭くておまけに酒臭い…？」

H Yが笑いながら言うと、

「アハハ！そうなりますね」

と言ってI Yは笑った。

…この話を男湯に居るH Gが聞いていたら、「酒臭くなったのは誰のせいだ！」と突っ込みを入れていると思う（作者）。

二人とも、温泉を堪能してさっぱりとする。脱衣所でH Yの髪にブラシをかけるI Yが突然

「先輩…F県領地から遙々ここまで付き合ってくれて、申し訳ありません」

と誤った。H YはI Yの急な謝罪に驚いて

「えっ？何？…」

と言って、I Yの方に振り返った。

「いや、先輩私の事を気遣ってくれたのですよね」

I YはH Yの瞳を覗き込みながら言うと、H Yは

「うーん、結果そうなったけど、私もかなり前から准尉に憧れていたから…機会があったらまた准尉とゆっくり話をしたり、教えを乞いたりたいなあ…と思っていたの」

H Yは脱衣所の天井を見上げて、

「あなたが突然、准尉に弟子入りすると言ったときね。昔の私は会社を辞めた時にはそれはとてもできなかったわ…却って、あなたが羨ましいとか妬ましいとかの感情が湧いてきてね。それでも何も考えず私も准尉の元についていく事にしたの」

「そうだったんですか…先輩も色々苦悩したのですね」

と驚くI YにH Yは風呂屋の脱衣所の天井に向かって

「そーよ、だからこの年になるまで独身！！」

と言って、H YとI Yはお互いに笑い合った。

H YとI Yが女湯の出口から外に出ると、H Gが待っていた。

「H Mが夜勤だから、家に帰って飯をつくるのも面倒なので、どこかで食べて帰ろう…」

とH Gが提案すると、H YとI Yは

「はい、ありがとうございます」

と返事をした。

●さてどうしようとめんどくせー

風呂屋の帰り道で夕食を済ませ、白山亭に帰ってきたH G達。玄関から2階の部屋に戻る

うとするH YとI YにH Gは

「話がある」

と言って手招きした。H YとI Yは互いに顔を見合わせ

「はこ」

と返事をした。

H Gは自室に二人を招くと、

「そこで待ってろ」

と言って、台所に行き、3人分の湯飲みと急須、茶筒。それとポットを持って来た。それを見て二人は「(長い話になるな...)」と感じた。

H Gは持って来た湯飲み等をちゃぶ台に置いた。H Gが急須を持つと

「あ、わたしがやります」

とH Yが言ったので、H Gは急須をH Yに渡すと

「...さて、二人供...ここに来てこれからどうするか話をしよう」

と言ったので、二人は「(...やはり、深刻で長い話になるな...)」と考え頷いた。

「まず、前から言ってるように、俺は現在無職だ。今まで再就職活動をしてきたが、うまくいかなくて雇用保険の失業給付もそろそろ限界...この先兵役の恩給(こちらの世界の厚生年金と同じ。作者注)にすがって生きて行こうかと思っただが、お前達が押しかけてきたので、そうもいかなかった...」

と言って、H GはH Yの淹れてくれたお茶をすすると、H YとI Yは無言で俯いた。H Gは続けて

「なので、なんとかしなくてはならない。俺にいくつかの考えがあるが、その前に、お前達が俺に何を習いたくて弟子入りしたかを聞かせて欲しい」

と言った。H YとI Yは、H Gの言葉に黙り込んでしまった...二人供H Gに教えを請いたいと言う気持ちは強いが、じゃ何と言う事を具体的に説明できないでいた。H Gはそんな二人を見ながら、別に責めるでもなく回答が出るまで待つことにして、座っている後ろの棚からパイプ煙草の道具を引き寄せ、パイプにパイプ煙草を詰めて火をつけた。

暫く立って、まず口を開いたのはI Y、

「私は准尉がF県領地の事件で、准尉のたてた作戦と采配を見ることができ、また私に生きる勇気を与えて下さったので、側に居て教えを請いたいと思い、弟子入りをしました」

と言ったので、それを聞いたH Yは「(I Yはここに来た動機しか話していない...けど、わ

たしはどうなのだろう… I Y が心配で来ただけでは、もう通じないだろうし…」

「作戦と采配と生きる勇氣か…それは、俺に作戦立案についての戦略や戦術のノウハウが学びたいと言う事でいいのかな？」

と H G が訊ねると、I Y は顎に手を当てて考え込み、やがて

「それだけではありません。私はあの事件で准尉の愛銃を動作不能にしまいました。今の様になって居ます」

と言つて、I Y は部屋の片隅にある新聞紙の上で完全にバラバラになった H G の愛銃を指さした。そして

「私は、准尉の愛銃をあの様にした責任を取りたいです」

と I Y が言うと、H G は方眉を上げて、

「責任？」

「はい、私が准尉の愛銃を動作不能にしたまま准尉にお返した責任です。今後こう行つた…

と言うより、そもそもシェリー酒をかけてしまったこと自体が、私が悪いのですが（「巻き込まれ親父の撤退」参照）…准尉のお役に立てるように愛銃を整備したりする…等も動機に入ります…すみません、うまく言えませんが…」

と言つて、I Y は下を向いた。それを聞いて H Y は「あーどうしよう！次はわたしの番ね

…でも、何を言ったらいいのか…」と困っていると、H G は

「成程ね… I Y お前さんは、これから生きる術とか銃器の扱いについて教えて欲しいのか…」

「とにかく、准尉のお役に立ちたくて、ご恩をお返ししたくて…すみません！多分上手く話せていません…」

と I Y が俯いたまま話すと、H G はため息をつき、

「ま、そんなもんだろう…二人供、半ば感情的に弟子入りしたようだからな…」

と言うと、二人供「（うわー、バレてるー）」と俯いた顔を一層下に下げて顔を赤らめていた。H Yは更に追い詰められて、「（あーどうしよう！次はわたしの番だし…）」と頭の中がパニック状態になった。H Gはそんな二人に、

「実は、以前からやりたい事があってな」

とH Gが話し始めたので、H Yはホッとした。

「准尉、なんですか？」

とH Yが訊ねると、

「I Yの話にあった銃の扱いだが、俺は以前から友人とガンスミスのアルバイトをしていてな…それを本格的な会社として仕事にしようと考えている」

「ガンスミスってなんですか？」

とI Yが聞くと

「ガンスミスと言うのは、銃器を客の要求通りに改造したり、客の銃器を預かって分解やメンテナンス等を行う仕事だ」

「そうなんですね」

「ま、I Yの学びたい事の一つはこれで叶う…だが…」

「「だが？」」

「ガンスミスの需要なんてそんなに多くない。元々この国の法律では一般人が銃器の所持を認められていない…」

「…ですよね」

と言うH Yの言葉に、I Yが手を上げて、

「質問です」

「何だI Y？」

「今の准尉の話で気になったのですが、准尉はF県領地の事件で拳銃を所持されていまし

た…今ですが…これって法律違反なのでは？」

「IY、それはいい質問だ。その答えは、この国では一般人の銃器所持は認められていないが、合法的に銃器を所持する方法がある。それは何か？」

とHGがIYに逆に質問した。HGの「親父モード」が発動した。

「えーと、私達が民兵会社時代は銃器を所持できましたから…そもそも民兵会社があるのは…えーと、正規軍の仕事の一部を担うため、戦場で業務するので護身のため…」

とIYがたどたどしく言うと、HYが

「今の民兵会社は、軍縮で徴兵制が無くなったものの、依然、隣国との小競り合いの戦闘が多く、正規軍だけでは兵力が足りないのです、それを補うための後方支援や戦闘自体の支援任務があるからです」

「はいよくできました。HY」

とHGが褒めると

「エヘヘ」

とHYが喜んだ。

「そう、民兵会社の社員はその任務上、合法的に銃器を扱う事が出来る。なぜ？」

「銃器を使用する場所と目的が明確であり、それを正規軍が認めているから…でしたっけ？」

とまたHYが答える。

「そうだね…よく覚えていたなHY」

と言って、HGが感心すると

「はい、確か准尉の最初の講義がこれでしたので…」

とHYは頬を赤らめて照れながら話した。

「では、次の質問…HYは分かっている様だから黙って」

「はい、准尉」

「民兵会社が戦場と言う限られた場所と任務で銃器を使う事が正規軍…すなわち国から許可されている訳だ。また正規軍の兵士や警察官とかも…戦闘や警らとかの任務で銃器を持ち歩く事が国から許可されている。では猟師が銃器を持ち歩いているのは？」

「害獣駆除の目的ですか？」

と、I Yが恐る恐る答える。

「そうなるよね…でも猟師は軍や警察と違って組織ではなく、個人だよ？組織の場合もあるけど、それは猟友会と言う集団でしかない」

「アッ！」

「おや、分かった様だなI Y」

「はい、一般人でも限られた範囲以外で銃器が扱える任務があつて、それを国が許可を出しているって事ですか？」

「そうだよ」

「…と言う事は、准尉は猟師さんですか？」

「そーじゃない！」

と言って、I Yの言葉にH GはともかくH Yまでこけた。

「コホン、一般人が銃器を所持・保管ならびに使用するためには国からの許可が必要と言う事だ」

「それを准尉は持っていると言う事ですか？」

とI Yが訊ねると、H Gは懷から“特別銃器携帯・使用許可証”を取り出して、H Y、I Yに見せた。それを見て二人は驚く。そこには銃器の種類が記載された欄があり、その全ての項目に○印が付いていて、欄の上に“限定解除”の文字が赤字で記載されていた。

「げっ、“限定解除”？…准尉、これはどういう意味ですか？」

とIYがHGに訊ねた。

説明しよう！（作者）：『特別銃器携帯・使用許可証』とは、民兵会社が産業の一つになっているこの世界でも、民間人は、正規軍や警察等の政府機関の管理下以外での銃火器の携行・使用は禁じられている。

それ以外で、銃火器の携行・使用を可能にするためには、この許可証の取得が必要。

許可証は、銃器の種類によりカテゴリーが決められている。

拳銃・短機関銃・小銃・突撃銃・散弾銃・軽機関銃・重機関銃（口径20mm未満）・擲弾筒（グレネードランチャー）。更に、上位免許の機関砲（口径20mm以上、40mm未満）や大砲（40mm以上200mm以下）の使用ならびに取扱いの許可証がある。

例…HGの愛銃は拳銃となる。この場合、この場合、許可証の使用銃器種別のマークの拳銃の欄に「○」が入っていれば、拳銃の使用が可能となる。

許可証は国家資格（政府機関に申請すれば、国際許可証になる）なので、毎4回の試験（筆記・射撃実技・取扱いならびに分解掃除実技）があり、難関。許可証の有効期間は3年。更新教育を受けることにより、許可証の更新が出来る。

HGは皇国政府軍の軍人時代に機甲師団の特殊車両試験部隊に配属され、試作兵器の各種テストをしていた任務上、この許可証のカテゴリーを全クリアし、『限定解除』と表記されている。ならびに上位免許も取得している。

但し、この許可証があっても、銃の携帯・保管だけの許可であり、発砲する時は、その行為に対応する政府・軍・警察機関・市区町村（害獣駆除目的のみ）の行政機関の長の事前許可『銃器発砲許可申請書（通称…発砲許可申請）』が必要。

無論、事後報告で許可申請書を発砲側から出すことは可能であるが、発砲目的が本人あるいは顧客の正当防衛である事。ないしは、行政機関が正当な使用である事を判断し、且つ検

察がそれを妥当と判断したもの。それ以外は、違反として刑事罰になる。その際に発砲した場所、人物、当該人物の特別銃器携帯・使用許可証と銃器の登録番号ならびに使用場所と理由、発砲弾数と回収した弾頭（但し、散弾の場合は、一部で可）と薬莢等…と提出する様式にそれらを書き込み、発砲場所を管轄している検察局に届けなければならない…と面倒である。

軍・警察機関ならびに民間の射撃練習場は、それ自体管理されているので、そこで民間人が銃を発砲するのは問題ない（但し、各機関の管理している銃器類に限る）が、外部から特別銃器携帯・使用許可証を携帯している者が銃器を持ち込んだ場合は、管理者が許可証の提示を求め、その番号を控えなければならない。

ちなみに、弾薬の保管・管理には、別途危険物取扱者試験に合格する必要がある。

「…書いてある通りさ、俺は民間のレベルで小火器類の取り扱いを国から許可されている。これを持っているので、俺はいつも拳銃を持ち歩く事が出来る。また、ガンスミスの仕事では、客の銃器を預かり、メンテナンス・試射に必要で、他にも銃器扱いならびに射撃のインストラクターが行えるんだ」

「そうだったんですね。ようやくわかりました」

とIYが言った。

「でも、この話…20年程前に俺の講義を受けたHYが覚えていると言う事は、当然新入社員時代の教育で教えたはずだぞ…お前は、2年程前に受けたはずだが…」

とHGが言うと、IYはバツが悪そうに、左手を耳に当てる仕草をする。HGはそれを見て

「IY…耳の難聴のせいじゃない！」

と言うと、IYは俯いて舌をだした。

「まあ、そう言う事だから、ガンスミスだけでは食べていけないことも事実…ましてや、お

前達二人を食わせる余裕が無いと言う事だ」

とH Gが言う

「わたし達が他所で働いたらダメですか？」

とH Yが訊ねた。

「お前達が他所で働くか…何をして？」

「…そ、それは、まだ決めてませんが、働きながら准尉の教えを受けるのもありかと…」

「…そーだなー、うーん」

と唸ってH Gは腕組みをして天井を見上げた。そしてH Y達を見て

「だったら、エージェント派遣をするか」

と言った。

「「エージェント派遣？なんですかそれ？」」

と言って、驚いた。

「エージェント派遣と言うのは、警護・護衛を始め、警察・検察の支援、消防団や自警団や猟友会またはその支援や、軍隊・警察・猟友会・民兵会社の銃器の整備請負（ガンスミス）や、銃器扱いならびに射撃のインストラクターが行える。ガンスミスより仕事の範囲が広い。ただ…」

「ただ？」

「これをやるには、こいつ（特別銃器携帯・使用許可証を指して）が必要になる。ガンスミスだけだと、俺の許可証だけで管理責任者として仕事になるが、エージェント派遣は二人供持ってないと、駄目なんだ」

「どうですか？」

「エージェントの任務は、さっき言った様な事なので、日常的に銃器を持ち歩く事になる。いつ使うか分からないからね。ありていに言えば、丸腰のボディガードはいないだろ？」

「成程」

「でも、俺は二人供危険な目に遭わせたくない」

とH Gが言うと、H Yは

「わたし、エージェントになります！」

と言ったので、H Gは驚いた。

「なぜ？」

「だって、エージェントになれば、ガンスミスの仕事もできますし、准尉から戦略・戦術についても学べると思いました」

「…危険な目に遭うぞ！」

「はい、構いません！危険な目は民兵会社時代に散々受けました」

とH Yは頑として言い放った。H Gは「(やれやれ…こいつは頑固だからな…)」と思い、

「すると、H Yの弟子入り動機は、俺の元でガンスミスとエージェントの仕事をすることです
学べると言う事でいいのか？」

と言うと、H Yは

「ハイ！（ヤッター、わたしが言う事なくて困っていたのを准尉が言ってくれて助かった！）」

と返事した。するとI Yも

「私も、H Y先輩と同じ考えです」

と毅然として言った。H Gは「(やれやれ…)」と思って。

お前ら二人を危険な目に遭わせたくないが、前の会社での成績は優秀だったからな…めんどくせー」

と言った。それを聞いてH Yは「出た！」と喜び、I Yは「？」と首を捻っていた。H Gは
続けて、

「だったら、エージェントやるからには、特別銃器携帯・使用許可証のここまで(限定解除)は取らなくていいから、せめて拳銃と散弾銃・小銃…あと擲弾筒くらいは取ってくれないとね。短機関銃と突撃銃は市街地では滅多に使用しないから」
と言った。

「はい」

H Gは二人の覚悟を感じて

「あと、もう一つある」

「何ですか？」

「表の店を再建する！」

「「c」」

「さっきも言ったとおり、ガンスミスだけじゃ三人供食べられん、エージェント派遣なんて、何時依頼があるか分からないし、ガンスミスは、今までの実績から客が居るが、エージェント派遣については客をこれから探さないといけないしね…そのための表の店の再建だ」

「…そうなりますね…」

とH Yが俯いて言った。実家が本屋で店の手伝いをしている内に経営について基礎的な知識を持っているので、H Gの言っている事は理解できた。一方、I Yはそういう知識が無いので、ポカンとして聞いていた。

「で、准尉。表の店の再建の目途は？資金とかどうするのですか？」

「…それには、当てがある…だから、今日は寝よう…」

「はい」「ハイ」

H YとI YはH Gの部屋を出て2階に上がる途中で

「H Y先輩」

「ナニ？」

「先輩は、さっきの准尉が民兵会社の新入社員教育で最初に話した事、よく覚えていましたね」

「あれ？…あれはねえ…毎年准尉が新入社員の教育の冒頭で言ってる話なの。わたし現役時代は任務が無い時は准尉の手伝いで新入社員教育をしていたから、覚えちゃった」

「あつ、成程…」

「あの話は、准尉も気に入ってる様で、わたしが入社して以来毎年だから、もう20年近くあの話してるわね…」

「そーですか」

●白山亭の一夜

その晩、一睡もできなかったHYは台所に行き、そこで夜勤から帰って台所で朝食を作っているHMを見かけ、

「おはようございます」

と声をかけると、HMは振り返り、

「あら…HYさんでしたよね…おはようございます。朝食はもうじきできますので、隣の食堂で待っていてください」

「いえ…わたし達は居候なので、なにか手伝います」

「…それでは…そこにある食器を運んでください…一番下の茶碗はおじさんのです。その上の茶碗は私のです。あとの茶碗はHYさん達が使ってください」

と言った。その時、HYが

「あなた…准尉が旅行している最中、一人で大丈夫だったの？」

と訊ねると、HMはHYが母屋の幽霊についてHGから脅かされていると直感して、

「…准尉？…ああ、おじさんの事ですね。はい、いままでおじさんが何日も留守をしている時がよくありますので、慣れてしまいました。それに、勤務先に近いこともあって、同僚の人達が夜勤前や夜勤明けの仮眠とかで良く遊びにきますので…その中には“見える人”もいますが、病院よりマシだと言ってますよ。私は確かに視えませんが、ここはご先祖様達を守ってくれてるんだと思います」

後から起きてきたIYが言うには、今居る食堂の隣にある居間の奥の部屋の遺影が飾つてある部屋に品の良い二人の老婆と一人老人が座っており、ニコニコしてこちらを見ています。2階、3階の部屋や廊下には女給姿や着物姿の若い女性の霊が何人も居て、盛んに入出入りしている。白山亭のフロアに居た男性の霊は母屋には入ってこないとのこと。それから、若い女性の霊も母屋の1階には居なくて、また入ってこないらしい…昨晚二人の寝ている寝室に度々入ってきて覗き込んだり挨拶していたりと話した。それを聞いてHYは蒼くなった。

「大丈夫ですよ、皆さん悪意がありませんし、かえって歓迎してくださるみたいですよ」とフォローするも、HYは震えていた。HMは

「ああ…そこにご先祖様たちが居るのね」

と遺影の方に手を合わせた。HYはそれを聞いて

「や…めて」

HGが奥の部屋から出てきて、

「諸君、おはよう。よく眠れたかい？」

「はい」

IYははっきりと返事したのに対して、HYは

「眠れませんでしたあ…」

と答えた。それを聞いてH Gは、

「H Y…、やっぱり実家に帰った方がいいんじゃないの？」

とからかうように言ったが、それに対してH Yはムキになり、

「准尉、進言します！わたし達は、昨晚は各自2階の一部屋を与えていただきましたが、今日からI Yと同じ部屋にして貰っていいでしょうか？」

とH Yが言ったことに対して、H Gは「意外と、こいつ粘るな…本当にムキになると言う事をきかない奴だな…」と思いつつ、呆れて

「折角2階の部屋に空きが沢山あるのにか？」

「はい」

「襖開ければ、隣のI Yの部屋と往来できるだろうに…さては、一人寝が寂しいか？」

H Gがからかって言うと、

「違います!!」

H Yはますます意固地になった。H Gはそれを見て「(やれやれ…)」と思いつつ、

「I Yはどうだ？」

と聞いた。I Yは喜んで

「はい、私は構いません。H Y先輩に色々教えていただきたいです」

と言った。H Gは「(ふーん…)」と思いながら、

「I Yがいいのであれば、許可する。また狭いと感じたら、別々の部屋を使うように」

「はあい」「ハイ!!」

「さあて、飯にしよう」

H Gが広間の食卓につくと、H Mが朝食を運んできた

「そう言えば、H Mさん。普段の食事はあなたが作るの？」

H Yが聞くと

「病院の当番割によつてはですね。今日は、私は午後の遅番なのでおじさんの分も作ります」

「そうなの…後で当番割教えて、これからは私達も准尉の食事作るから…」

「ええ？いいんですか？」

「ええ…私達、准尉に弟子入りしたから当然よ！…それから、敬語は使わなくていいわよ」

「…そうなんですか？おじさん？」

「嗚呼…押しかけ女房ならぬ押しかけ弟子共だ！」

H Gは「フンッ！」と鼻息を鳴らして、新聞を広げた。

●ご近所挨拶

弟子入り2日目の行動は、ご近所への挨拶。

H GはH YとI Yを連れて商店街の一本裏道に入ると、そこにある立派な構えの屋敷の門の前に行く。門には「葛葉組（くずのは組）」と立派な看板が掛かっていた。

H G達が門を潜ろうとすると

「ゴラア、ここを葛葉組の事務所と知っているのか！」

と門の内側から、だみ声の怒声が浴びせられた。

H Gは気にもせず、入ろうとするとH Gの前に如何にもその道の人と思われる男が立ち
はだかり道を塞ぎ

「俺の言う事を聞いてねえのか…オイ！」

というなり、H Gの胸倉を掴んで下から見上げて睨みつける。H YとI Yは後ろでオロオロ
していたが、H Gは全く意に介さず、

「親父（組長）さんはいるかね？」

と至って冷静に言う。

「親父になんの用でい！」

「用があるから来たんだよ」

H Gは依然胸倉をつかまれたまま…

その時、胸倉を掴んでいる男の頭を後ろから拳で殴る人物が居た。

「イテ！なにす…だつ、代貸…」

と男は殴った人物に振り返り、殴った人物を見て驚いた。

男を殴った人物も、H Gに劣らずスーツ姿の立派な紳士であるが、やはりその道の品が漂っていた。『代貸』と呼ばれた紳士は、男の頭を押さえつけ、「こらっT、手を放しな！」

とドスの効いた声で言った。

「やあ、代貸」

H Gはニコリとして言う、代貸は

「これはH Gさん、親父がお待ちしています。中へどうぞ」

と言って、男をH Gから引き離すと、H Gに道を譲った。

「じゃ、お邪魔するよ。H Y、I Yついておいで」

目の前を通り過ぎるH YとI Yを見た代貸は、

「両手に華ですか…お安くない」

「なにを言ってる…俺の弟子どもだよ」

と代貸の冷やかしにも笑ってH Gは答える。H YとI Yは怯えていた。H Gが門を潜り、玄関に入るのを見送って、代貸は男の方に向いて、

「よく、覚えとけ！あの方はH Gさんと言って、白山亭に住んでおられる。親父の親戚（曾祖母の異父妹の孫）だ！」

「ヒッ！」

邸内の事務所に通されたH G達は、そこで待ち受けるH Gより遥かに年上の初老の男に勧められるまま応接セットのソファーにかける。

「よう、よく来たH G」

「親父さんも、お元気そうで…あつ、これ旅行の手土産です」

と言つて、H GはI Yに持たせた手土産を渡す。それを直接受け取り、*“親父さん”*と呼ばれた組長は嬉しそうに

「おう、ありがとうよ。旅行はどうだった？」

「いやあ…旅先で事件（F県領地の事件）に巻き込まれて…」

「そうかい、それは災難だったな」

とお互い笑いあった。

「それはそうと、この二人の女子（おなご）は？」

「私の弟子のH YとI Yです」

「H Yです、よろしくお願いします」

「I Yです。よろしく願ひいたします。」

それを聞いて、組長は驚いて

「弟子？するつてえと、白山亭（この場合、白山亭の敷地内ある母屋他を含む建物全体を指します。作者注）に住むのかい？」

「…そうなります」

「白山亭（こっちは、ミルクホール白山亭の事。作者注）は？」

「まあ、再就職もできずに、雇用保険の失業給付もそろそろ限界…兵役の恩給にすぎるしかないかと考えてまして…それに」

「それに…？」

「このように、弟子が押しかけて来たので、自営業を始めようかと…それで、白山亭をまずは再営業してそれから、もう一つの稼ぎであるガンスミスを正式に始めようかと」

「そうかい！ようやく白山亭を継ぐ決心をしたか…それはわしらのひいばさんとお前のおばあさん（組長はH Gの祖母の異父兄の孫）がさぞや喜ぶだろう！」

組長は満面の笑みをたたえて言った。H YとI YはH Gの隣で聞いていて、「（昨晚の話と順番が違う！）」と思った。

「しかし、白山亭の建物の掃除や改修費用が…」

とH Gが困り顔で言うと、組長はH Gに手を見せて言葉を遮り、

「まった！皆まで言うな！！これは、わしら親戚一同、白山亭の再建に尽力する。白山亭はH Gお前のモノだけではない！この町内にいるわしらのひいばさんの子孫皆の宿願だからな」

「その言葉、もったいないです」

と言って、H Gは深々と頭を下げる。H YとI Yもそれに倣って頭を下げた。

「お金のことは、わしらに任せろ。無利子・無担保で貸してやる」

と言って、組長は胸を叩く。

「そうか、そうか…やっと、白山亭を再建できるか…で、従業員は？その弟子達に？」

「はい、当面白山亭の女給をやってもらい、経営が落ち着いたら、人を雇って彼女達はガンスミスとエージェント派遣会社の仕事をやらしてもらおうかと…」

それを聞いたH YとI Yは「（エー、女給？聞いてないよー）」と思った。

「そうか、そうか、白山亭の女給はその二人の様に美人さんがいい」

との言葉にH YとI Yは「まあ！」と喜んだ。

「で、そのガンスミスと…あとエージェント派遣会社とか言ったな、そちらの会社名は？」

「〃碇屋〃を名乗ろうと思います」

「いつ、碇屋？HGお前…その屋号は…」

組長は驚いて、HGに問いただと、HGは

「はい、先代の碇屋の話は父から聞いています。私はこの屋号も白山亭同様継ぐようと思います。ただし、碇屋の仕事は変わります。新生碇屋です」

「そうかい…碇屋の屋号も継ぐのかい」

「まあ、先の先の話ですが」

●お前達、まずは女給として稼ぐ事！

葛葉組の屋敷を辞すと、HYとIYはHGに詰め寄り、

「あのー、あのお方とはどんな関係ですか？」

「〃親父さん（葛葉組組長）〃…商店街会長は親戚だよ。俺のひいばさんの曾孫の一人で、俺のおばあさんの異父兄の長男に当たる人の孫…」

「異父兄？」

「ああ…俺のひいばさんは生涯3度結婚した人でね、俺のおばあさんは末娘。この街にはひいばさんの曾孫に当たる人が多くいるんだ…あつ、昨日の昼に入った洋食屋さんも俺の親戚」

「「そうなんですか！」」

と言って、二人は驚いた。そして、HYが

「昨日の話しと、順番が違うのですが…」

とHGに訊ねると、HGは

「白山亭の再建が、親父さん達、親戚の悲願だと言ってたろ？これを先にガンスミスとエージェント派遣の会社を興す話を先にしたら、資金調達どころでなくなるからさ」

とHGはシレつと言った。それを聞いたHYは

「えげつな―」

と言った。IYも

「あと、白山亭の女給の話は聞いていませんが…」

とHGに訊ねると、

「さっき、初めて話した」

「「ええっ!」」

「だってお前ら、俺の弟子になったら、当面の稼ぎは必要だろ？ 昨晚話したようにガンズミスとエージェント派遣やるには、特別銃器携帯・使用許可証が必要だからな。お前ら、まだ持っていないだろ？ だから、特別銃器携帯・使用許可証を取るまで、白山亭の女給をしてもらう」

「「そんな―（これもえげつな―）」」

この後、HGはHYとIYを商店街の親戚筋や友人や知り合いの家や店を巡り、母屋に帰ってきた。

「今日は、ここまでにしよう。疲れたろう…明日は、警察署とかの役所関係に挨拶に行く」

「「ふぁ…」」

とHYとIYはすっかり疲れて返事をした。

HGは母屋でHYとIYに自分の書齋に案内して、

「特別銃器携帯・使用許可証の勉強に必要な本はここにあるから、自由に持ち出して読んでいいぞ!」

HGは、書齋の本棚を指して言った。そこには、政治・経済、法律、自己啓発、戦術・戦略や銃器・兵器の書籍とそれらを圧倒する漫画の単行本や映画のビデオ等があった。

それを見まわしていたH YとI Yは本棚の隅にあるB 5サイズに製本してある成人向け漫画を手にとった。H Gが気づいて「(しまった!)」と思ったが後の祭り。二人は成人向け漫画本をパラパラめくって、H Yは、そのまま

「キモッ!」

と言つて、I Yは

「うわー」

と赤面してパン!と本を閉じ、二人とも冷笑と軽蔑のまなざしをH Gに送った。

「いいじゃねえかよ!!」

H Gは必死になって弁明にならない言い訳をした。それに対して

「そりゃ、准尉”殿”も大人のど・く・し・ん(独身)男性ですしい」

H Yのチクチクと刺さるような言葉を受けて、H Gはたじろいだ。更にH Yは続けて

「私も実家では見ますけどー…あくまで売り物としてえ…」

さすが実家が本屋だけある。更に

「でもお、准尉は還暦を迎えたのですよねえ、いい大人があ!」

と畳みかけられた。H Gは無言で落ち込んでいた。

何事も今まで、H Gにかなわないと思っていた二人であったが、H Gの落ち込む姿と弱みを握った感があり、悦にいった。

その後H YとI Yが揃って、度々H Gの書斎に籠って勉強しているのか、それともH Gの所蔵の漫画類を読んでいるのか分からない日々が続く。

● R 交易商公社とR R

翌日、H GはH YとI Yを連れて、所轄の港町警察署と港町水上警察署、H Mの勤めてい

る港町総合病院とか、役所関係に挨拶に行く。それが終わると、H Gは

「大体、主な所は挨拶したが最後に肝心な所に挨拶に行く」

と言って、二人をY国際港商店街のメインストリートの裏道の商店街にあるC国雑貨商”R 交易商公社”に連れて行った。

「ここは…」

と事務所の前で看板を見上げてH YはH Gに訊ねた。

「この会社はね、C国特産品の食材・薬材・酒・タバコ・雑貨類の他にコーヒー・茶類、スパイス等手広く扱う商社。ここの社長R Rは俺の友人でね。いずれ白山亭を再建した時にお世話になる」

「そうですか…」

H GがR 交易商公社の奥にある事務所に入ると、R Rが帳簿をチェックしていた。H Gの姿に気づくと、

「いらっしやいH G」

「やあ、R R」

とお互い挨拶した。

「旅行はどうだった？」

「いやー、あちら（F県領地）で事件に巻き込まれて…」

と言って、お土産をR Rのデスクに置くと、

「おう、ありがとう…それは、災難だったな」

とR Rが言ったところで、R Rの妻のR Lが事務所に入って来た。

「あんだ、今月の発注票…って、あらH Gさんいらっしやい」

と言って、H Gに笑いかけたが、H Gの後ろのH YとI Yに気づいて、

「後ろの娘達誰？」

とH Gに訊ねた。R Lの言葉にR RはH Gの後ろにH YとI Yが居るのを認識して

「おい、H G！隅に置けんな」

とニヤけた。

「ああ…この娘達は俺の前の会社の教え子。今度俺の弟子として白山亭に住むことになった」

「何ですって？」

とR Lが驚いて言った。R Rも

「弟子い？」

と言って驚いた。それで、H Gは

「実は…」

と前置きして、R 夫妻にF 県領地の事件の事と、H YとI Yの事を話した。それを聞いたR Lは

「…そうだったの…まあ、お茶も出さずにごめんなさいね。そのテーブルにどうぞ」

と言って、R Lは事務所のテーブルにH G達につくように言うと、C 国特産のお茶を淹れながら、

「挨拶が遅れたわね、わたしはR 交易商公社の副社長のR Lよ。こっちはわたしの亭主、この会社の社長R Rよ」

と言った。

「はじめまして、H Yです」「初めまして、I Yと申します」

と言って頭を下げると、

「初めましてR Rです。H Gとは子供の頃、白山亭で知り合ってから友人です…あと私の曾祖父母とH Gの曾祖母同士は知り合いで、それ以来の付き合いでもあります。よろしく。

当店は主にC 国特産品を手広く扱う商社で、無論C 国以外の食材も扱っています」

と挨拶した。

「なので、白山亭を再建するにあたり、コーヒーや調味料等の食材の卸を引き受けてもらおうと思っただけ」

とH Gが言う。

「何だっけ？」

とR Rの糸目が珍しく見開く。

「いや、昨日親父さん（商店街会長）の所に挨拶に行って、白山亭の再建について話をしたんでね」

「…だったら、俺も呼んでくれたらよかったのに…」

とR Rが拗ねたように言う。

「すまん、お前と一緒にだとしても俺がお前に頼ってしまうので、一人で行かせてもらった」

とH Gが言うと、R Rは納得して、

「そうか…俺のお婆さんの言った通りに、いよいよ覚悟を決めたか？」

「ああ…」

「お互い曾祖父母の代からの付き合いも再開するな」

「そうだね。またよろしく」

「HYさん、I Yさん、H Gさんの事よろしくね。なにかあったら迷わずウチに来てね」

とR Lが言うと、H YとI Yは

「はい」「ハイ」

と返事をした。

I Yが辞めた民兵会社近くのアパートを引き払い、母屋に引っ越してきた。H GとH Yは手伝うが、その時H GはH Yに対して、H Y自身の引っ越しについて尋ねたが、H YはS県

領地からの引越しは遠くてお金が掛かるなどと笑って誤魔化すばかりだった。

● 白山亭

H Gは母屋から年季の入った鍵を持ち出した。

そして、表通りに出て、白山亭の扉の前に立つと「さあて…」と言って扉に鍵を差し込み、鍵を開錠した。H Gが力を入れて扉を押すと、鈍い音をたてて扉が開いた。

H Gが1階のフロアに入ると、少し黴びた匂いがする重い空気がH Gに纏わりついて一瞬H Gの耳に女性達の笑い声が聞こえた…H Gは驚くがその声はすぐに聞こえなくなった。

「…気のせい？…いや…」

H Gは頭を下げて

「不肖、H M（H Gの姪の名前ではなく、H Gの祖母の名です。作者注）の孫H Gです。この度はこの店を再建する事になりました。よろしくお願いいたします」

と言うと、H Gにまわりついていた少し黴びた匂いがする重い空気はたちどころになくなった。それから薄暗かったフロアが少し明るくなったような気がした。

H Gは奥の厨房に向かい、配電盤を点検する。見たところ、問題なさそうだけど、プロに任せることにした。

白山亭の工事は、地元の工務店（やはりH Gの親戚）を商店街会長が連れてきて会長を交えて、スケジュールや修理箇所や改装（主にエアコン等の近代化）について打ち合わせて進めていった。

またH G達は白山亭が改装中に、駅前の純喫茶店のマスターとB a rのマスター（二人ともH Gの親戚）に弟子入りした。同時に白山亭を再建するための必要な許可申請・取得や経

営のノウハウを学んだ。

●KMとSK

HGは白山亭の手入れについて工務店ならびに業者と打ち合わせるのと並行して、白山亭と碇屋を再建するのに必要な人材を呼び寄せた。

KMはHGの母方の従妹で、以前KMの父親の経営する会社の経理をしていた。父親の死後、弟が跡を継いだので、会社を辞めてスポーツクラブのマッサージトレーナーとかファイナンシャルプランナーや社労士とかしていたが、年齢により今はあまり仕事をしていない（年齢はHGより2才歳上）。HGはその彼女を呼び寄せ、工事中の白山亭内でHGはKMと話をした。

「Gちゃん、電話で聞いたけど、本当にあんたのおばあさん店継ぐのね」

KMは工事中の店内を見回した。

「うん」

「それで、経理の人手が必要だから、あたしを呼んだんだ」

「…それだけじゃないんだけどね」

「？」

「この店以外に、ガンスミスの会社も始めようとしているし、またエージェント派遣会社をその内始めようと考えている…」

「そんな、一度に沢山？」

「いや、まずはここ（白山亭）の再建が最初。ガンスミスの事は知ってると思うけど、今までアルバイトだったのを会社にする…それが次…最後にエージェント派遣会社」

「そーなの」

と言って、改装中の白山亭店内を見回し、H Gに向き直ると、

「まあ、店は工事の具合から見て再建できそうね…資金はどこから？」

「この商店街の会長から借りている…無利子・無担保で…」

「ああ…あの会長さんね…おばちゃん（H Gの母親）が言ってた。あんたのひいおばあさん…だっけ？その人の子供の内の一人の孫って人ね…あんたちって、おじさん（H Gの父親）の血縁関係多いのと結束力強いからね」

「うん…」

「でガンスミスの会社の方も、お金借りてるの？」

「ここ（白山亭）の改修と同時に、裏の建物も手を入れて貰っている。ガンスミスの仕事は元々別棟でやってるけど、本格的にやるので、こちらも手を入れている。それらも商店街会長から借りている」

「…そう…じゃ、結構な額になるわね。あんたその歳で返せるの？お互い若くないのよ！」

「それを言われると…」

K Mの頭の中では、店内を見回しただけでざっくりした改装費用が見積もられて、返済の事まで心配している様だった…この方面の見積もり勘定はH Gには残念ながら出来ない。

「この店はいいとしても、ガンスミスの会社とエージェント派遣会社の顧客確保出来ないの？」

「ガンスミスの会社の顧客は、今は近くの港町警察署と港町水上警察署、それにY市銃砲試験場と…えーと、Y市役所鳥獣駆除係、港町シューティングセンター…あと非公式に葛葉組…(笑)、それらはアルバイトの頃からの顧客…あとどこか新規開拓しないといけないと考えている」

「そう…そんだけ顧客が居て、儲けは？」

「トントン…つてとん」

「ダメじゃん！」

「…はい」

「それじゃ、エージェント派遣会社の顧客は？」

「…それは、まだ…」

『まだ…』って、ダメじゃないの！それじゃ、エージェント派遣会社なんて始められないわよ」

H GはK Mの言葉に委縮した。

「まあ、エージェント派遣会社はまだ先の話よね？」

「うん」

「じゃ、それは後にしましよ…でもエージェント派遣会社って、雇う人居るの？それとも、Gちゃん一人でやる気？」

「うん…既に要員は二人ほど居る」

「えっ、まだ会社立ち上げていないのに、人が居るの？」

「うん」

「ダメじゃん！…その人達のお給料どうしているの？」

「今、母屋に住んでいる…俺の弟子として…」

「弟子いーなにそれ？どうして…どういう意味？その人達、大丈夫なの？」

K Mが興奮して早口でまくし立てる。H Gは閉口した。

「…」

「黙って居ちゃわかんないでしょ！その人達母屋に居るのね、会わせて！」

K MはH Gを引きずるようにして母屋に向かった。

「こんにちわー」

「はい…あらKMさん、お久しぶりです。Sオバサン（KMの母）は元気ですか？」

「あら、Mちゃん久しぶりー、ウチの母は元気よ」

とKMは玄関に出てきたHGの姪HMと挨拶する。

「ところで、Mちゃん」

「はい」

「こいつが、弟子とってここに住まわしているってホント？」

KMはHGの襟を掴んで指さして言った。

「あっ…はい」

「呼んできて…大至急！」

「はっ、はい」

HMは階段の下に行くと

「HYさーん、IYさーん…ちょっと降りてきてくださいますかー」

と声をかける。

HYとIYが階段を駆け下りてきた。それを見たKM…

「ナニ？…こらG！こんな若い娘囲ってどーすんの！！」

KMは凄い怒気でHGを恫喝した。そして、KMはHYとIYにつかつかと歩み寄ると

「あなた達…こいつに騙されていない？大丈夫？」

HYとIYはいきなり現れたKMの言葉にキョトンとしていた。

「Mちゃん」

「はい」

「この娘達、いつからここに？」

「つい最近です」

「…最近…ねえ…まあ、ここ（母屋玄関）ではなんだから、食堂でお話しましょ。二人も来て」

と言って、KMはHGを引つ張ったまま、母屋に上がり込む。HYとIYはお互い顔を見合わせて、KMについて行った。

食堂で、HGとKM、その向かいにHYとIY…その上席でお茶を淹れるHM…

「自己紹介を忘れていたわ、あたしはKM。HGの従姉よ」

「はじめまして、HYと言います」

「初めまして、IYと言います」

二人は恐る恐るKMに挨拶した。

「あなた達はこれ（HG）とどういう関係なの？」

「こいつらは…」

とHGが言いかけると、

「あんたは黙って！」

「…はい」

KMの一括にタジタジとなるHGを見てHYとIYは「あの准尉でも敵わない人が居たんだ」と驚いた。

「私達は…准尉…じゃなくて、HGさんの居た会社で社員教育を受けた教え子です」

HYが言うと、IYも頷く

「教え子？…HGが居た会社の？…って事はあなた達軍かその関係者？」

「はい、民兵会社の元社員です」

「ふーん、そうなら、出自は問題がなさそうね…でも、なんでHGの弟子になんかになったの？」

K Mが疑惑の目で二人を見る。そして、

「いいのよー、こいつ（H G）に騙されたり、弱みを握られてるなら、正直に言ってね。オバサン助けてあげるから！」

と続けると、H Gが

「あいな！」

「あんたは黙っとれ！」

「…」

K Mの恫喝にしょんぼりするH G

「あ、K Mさん…チョットいいですか？」

H Yが恐る恐る口を開く

「なに？」

「あの私達は、先日のF県領地でですね、事件に巻き込まれて…」

「うん知ってるわ、なんか凄い事になってたみたいね…連日報道していたし、今でも報道特集番組とか放送されているし」

「あの事件現場に私達居たんです」

「えっ？」

「事件前日に帝都の本社からF県領地に私達の部隊が派遣されて、任務の話なので詳細は話せませんが、F県領地に着いた途端、事件に巻き込まれました」

「それから？」

と言って、K Mは身乗り出す。H Yは続けて、

「現地の部隊と合流しても総勢30人程だったので、どうする事も出来なくて、困っていたところ、偶然F県領地に旅行に来ていた、じゅん…じゃなくてH Gさんとお会いして、H Gさんの指揮でF県領地から逃げる事ができたんです」

「…ああ、H GがF県領地に旅行に行ったのは知ってるけど、あの事件に巻き込まれたんだ」

「はい」

「ふーん、それでなんで二人はH Gの弟子に？」

「はい、H Gさんにはあの事件で混乱していた所を助けていただきまして、また色々教えていただきました。また作戦指揮が凄かったのもっと教えを乞おうと思って二人で会社を辞めて押しかけ、弟子にして貰いました」

「えっ？押しかけて来たの？」

「はい」

「ふーん、あなた達自分から押しかけて来たのね」

「はい」

「あたしはてつきり、H Gに騙されて連れてこられたかと思ってた…ああびっくりした！」
と言って、K Mは笑った。そしてあきれ顔で

「でも、なんでこんなの（H G）にわざわざ…でも、分かったわ…あたしここの経理やるように言われたの、よろしくね。いい？あなた達、H Gに変な事されそうになったら、あたしに言うのよ！オネエサン助けてあげるから…」

「はーん」

「あのなー」

H Gは「『オネエサン』じゃないでしょ、『オバチャン』だろ！」と突っ込みを入れたかったが、相手がK Mなのでできなかった。

彼女は帝都で母と暮らしているので、通いで来てくれることになった。母方の従妹なので、当然「見える人」でしかも、一族一霊感が強い。しかし、それなりに対処法も知っているし、白山亭の霊たちが悪い人たちではないことを見抜いている。

…それともう一人…

母屋の玄関に杖をついた男が訪ねてきた。

「H G居るかい？」

応対に出たH Yは「あの、どなたですか？」と訊ねた。H Yが出てきたので男の方も驚いて「誰？」と聞き返した。

「あら、S Kさんいらつしやい」

廊下の奥からH Mが顔を出す。それを見て男はH Yをスルーして「奴は？」と聞くと「部屋に居ますよ」「分かった。いつも通り縁側からお邪魔するよ」「どーぞ」

縁側に赴いた男は、縁側で愛銃の手入れをしているH Gに「よう」と挨拶した。H Gは手を止めて男を見て

「よう、S Kいらつしやい」

とニコやかに挨拶を返す。S Kが「邪魔するよ」と言つて、縁側に腰掛けた。そこにH Yがお茶を運んできた。

「どうぞ」

と言つて、H YはS Kを見る。H Yの視線に気づいたS Kは

「おい、H G。この娘だれ？お前の娘か？」

と聞いた。H Yは小柄で童顔なので女子高生に間違われることがある…これでも当人40代半ば。

「娘？うーん、そんなようなのだが…俺の娘ではないよ…そんなことお互いよく知ってるじゃん」

H Gは愛銃の手入れをしながら、苦笑した。

「ハハハ、そうだな」

H GとS K互いに60歳になるが独身である。

「じゃ、もう一人の姪か？」

「それも違う」

H Gは手入れていた愛銃の組み立てが終わるとS Kの方に向き直り、

「紹介するよ、俺の弟子1号のH Y…彼はS Kと言って俺の軍隊時代の相方だ」

と言って、互いを紹介した。

「でいい？」

S Kが驚き、かけていた黒縁眼鏡がずれる。H YはS Kの反応に笑いそうになりながらも、さつきスルーされたので、そのお返しにと「スン」と平静を装い

「H Yです。H Gの弟子1号…？です」

と言って、挨拶したが内心「(い、1号…って)」と思った。気を取り直したS Kは

「H G…おめえ、弟子なんてとる余裕あったんだ…」

と小馬鹿にして言った。H Gは憮然として

「うん…それを言われると…」

と頭に手を乗せて弱腰の返事をした。H GはH Yを横目で見て

「いや…実は押しかけられたんだ…」

と吐露した。

「そりゃ、災難だね。おい、そういえば1号といったよな、だとすると2号さんも居るのかい？」

「うっ、うん」

「そりゃ大変だな」

S Kはガハハッと笑う。弱り顔のH G

「そこで、お前に頼みがあるんだが…」

「何だい？金はねえよ！」

S K 即答。H G は呆れて

「んなこと知ってる。お互い様だ」

「じゃなんだい？」

「あそこにあるボイラーを使えるようにして欲しいのだが…」

「あのオンボロを？」

「うん…お前ボイラー技士の免許、まだ持っていたよな？」

「そうけど…前にも言ったように、操作マニュアルが無いと…」

S K が躊躇っていると、H G は一冊のノートを S K の前に差し出した。S K はそれをパラパとめくり、

「これって…」

S K は驚いて H G を見る

「うん、俺の爺さんが作ったここのボイラーのマニュアル。この前見つかったんだ…」

実は、I Y が H G の祖父の霊が遺影のある部屋の棚をしきりに指さしていたので、不思議に思い見てみたら、色々な書類の中から出てきた。

「ちょっと暫く貸してくれないか？」

「いいよ。それともう一つ頼みがあるんだが」

「何だい？」

「俺も民兵会社定年退職して次の勤め先探していたんだが、これ（後ろに居る H Y を親指で指さして）とか扶養するのが増えたんで、この際、表の『白山亭』の再建と以前からやっていたアルバイトのガンスミスを正式に仕事にしようと思ってさ、あそこ（向かいの別棟を指さして）で以前から俺とお前で作業場に使っていたが、今度手入れしてガンスミスの工場を整

備するが、今まで通り一緒にやってくれないか？」

H Yは「『これ』扱いかい！」とむくれる。

S Kは成程と頷きながら聞いていた。そして、

「なーる。ガンスミスの仕事は、以前から俺とお前で内職していたけど、正式に商売にするか…昔から二人の夢だったからね…いいぜ」

S Kは2つ返事で了解した。

「そこでだ、S Kお前両親が亡くなり、妹さんも嫁いで独り公団団地の4階に居るけど、その足では辛いだろう…いっそ、ボーラーマン兼任であそこに引っ越してこない？当然、家賃、敷金ナシで…飯も出すけど、飯代はいずれ貰う」

「いいねえ…改装終わった後で内覧させてもらってから返事する」

「それでいいよ、無理は言わん」

「ははは」

●白山亭の制服

H GはH YとI Yを連れて白山亭の2階に上がる。そこには2つのホールがある。手前の通り側がパーラー・ホールと言って、下の店内と違って静かにゆっくりと歓談を楽しんだりする部屋であるが、一方でダンスホールも兼ねている。奥の部屋はパーラーのテーブル・椅子やソファークセットを収納したり、ダンスホールを利用する人が着替えに入るための倉庫になっている。

H Gは奥の部屋に入ると、作り付けのクローゼットを空けた。そこには、かつての白山亭の女給の制服が吊るされていた。

H Gは制服の状態を確かめて

「…どうやら、虫に食われてないようだから、この中から程度の良いものとサイズの合うも

のを選んでくれる？」

「はい」

やがて2人はサイズの合う女給の制服を選ぶと、ホールの外に居たHGに呼びかける。H
Gがホールに入ると、まだ着替えていない2人が制服を抱えて居た。

「どうした？」

「どう着るのか分からないんです」

「…そうか」

と言って、HGは2人を連れて母屋に戻ると、遺影のある部屋の棚から一冊のアルバムを取り出した。それを捲ってHGはページにある写真を指さして、

「この様に着ればいいと思う」

そこには、モノクロの写真で女給の制服を着てポーズを決めている女性の姿があった。その隣には、後姿の女性の写真があったので、

「なるほど、こう着るんですね」

とHYは言った。

やがて隣室で着替えたHYとIY…写真通りに着つけていた。それをスマートフォンで撮影するHG。

「まるで、詠えたみたいだな…」

とHGが言うと、

「私…昔の人の身長ではかなり高いと思いますが、よくサイズがありましたね」
とIYが言うと、HGはアルバムの別の写真を見せて

「白山亭には外国の人も居たみたい」

と言った。H Y、I Yが見るとモノクロ写真ながら明らかに外国人と思われる顔立ちと高身長
の女給の姿が写っていた。

I YとH Yがアルバムを捲る…そこには各時代の女給を映した写真があり、それを見た
H Yが

「昔は着物にエプロンとか割烹着姿だったんですね…」

「着物の襟を見てごらん。襟にレースを付けているだろう…この割烹着の人は、ひいおばあ
さん…当時のフロア責任者はこの格好をしていたそうさ。他の女給さん達はこちらの写真
にある通り、和服にエプロン姿…その後洋装が巷に流行ると、今の制服になったらしい」

「へえー、そうなんですね」

と言って、I Yが遺影のある部屋を見ると、H Gのひいおばあさん（の霊）がニコニコして
居た。

白山亭の改修工事は粛々と進み、また、S Kによって別棟のボイラーが復活したので、母
屋の風呂屋や白山亭の厨房にお湯が供給できるようになった。

H Gは帝都にある電気部品街にある古い知り合いの経営している電子機器の部品店に行
き、I Yの補聴器の製造を依頼した。店主にH Gが期待する機能の仕様を説明し、以後I Y
がこの店に度々足を運んで完成させた。

それは、通信機能を持った左耳専用の補聴器。通信機能はI Yのスマートフォンを介して
行い、通常時にはI Yの難聴の左耳を補助している。

店主は、H Gに「これ（補聴器）量産して売っていい？」と聞いてきたので、H Gも余程
傑作ができたのと思い。製作費を値切る形で許可した。

そして、とうとう白山亭が再開する事になった。

●白山亭開店

白山亭を再開するにあたり、HGは店の看板を掛け変える事にした。

今まで「ミルクホール白山亭」を「白山亭」にした。これは「ミルクホール」と言う言葉に実は色々な意味があり、その一つが先代「碓屋」の商売（娼館）の意味も含まれている。碓屋の営業は、白山亭の3階に細かい仕切りがある部屋があり、そこで営まれていた。それに対して、新生碓屋は、業態がガンスミスとエージェント派遣になった。また白山亭は、昼は純喫茶（女給喫茶）、夜の営業をPubとするので、その意味で、看板を掛け変えることにした。当然、白山亭自体古い歴史があるので、取り外した看板は店の入り口にあるレジの後ろの壁に「白山亭の歴史」と書かれたパネルと共に前の看板を設置した。

変えたのは入り口の看板だけでなく、入り口横のメニュー表には「ミルクホール白山亭」と、わざと残していたりする。

店内は、ほぼ以前のまま残すようにした。壁の古いビールやドリンク会社の瑠璃製の看板、古い電話はオブジェとしてそのままにして、テーブル・椅子も補修しただけ。店内奥にある小さなステージもそのままにして、床を張り替えた。大きく変わったのは、天井の空調と曾祖母、祖母の時代は瓶ビールを提供していたので、バーカウンターにビールサーバーを設置した。

それから床材を張り替えた際に、今までボイラーの蒸気で暖房に使用していたセントラルヒーティングを同じくボイラーの蒸気で温める床暖房に変え、同時に電気・通信ケーブル類を設置した。これにより、店内で無線通信による携帯端末やPCの使用が可能となり、窓際のテーブルでコンセントが使えるようになった（但し、これらは隠し機能）。

開店後、しばらくは目の回る様な忙しさだった。

なにせ、店内はマスターのHGと女給のHYとIY、他に姪のHMとその友人の看護師達
がアルバイトで手伝ってくれたが、人手が足りない…それに新米マスターのHGのコーヒ
ーが一々ハンドドリップで淹れるので手が遅くて、なかなか注文がさばけず…祖母の白山
亭を知る人曰く「あんたの御婆さんは、後ろ（バーカウンターの後ろにある棚）のサイフォ
ン10個全部フルに使ってコーヒーを捌いて（淹れて）いたよ…」と。

商店街会長から「うち（葛葉組）の若い衆を貸そうか？」と言われたが、さすがに断った。

HGは親戚筋の弟子入りしていた駅前の純喫茶店から応援を乞う事にした。

メニューは、HGの淹れる「白山亭オリジナルコーヒー」と軽食の「白山亭サンドウィツ
チ」と数種類のケーキだけ…

白山亭オリジナルコーヒーと白山亭サンドウィツチは、曾祖母と祖母のレシピが残され
ていて、特にサンドウィツチは白山亭が開店していた間、近所のパン屋で「復刻、Y国際港
町駅前の老舗白山亭のレシピを忠実に再現したサンドウィツチ」通称…白山亭サンドウィ
ツチ」として売っていて、Y国際港の波止場の待合室にも売店があり、地元土産として人気
の商品…

この白山亭オリジナルコーヒーと白山亭サンドウィツチが白山亭の店内にてセットで、
しかもかつての女給姿の女性が給仕して食べられるとあって、かつての白山亭を知る近所
の老人をはじめ、土産で買ってくれていたリピーター、マスコミの取材やその記事を見てき
た人とか、またHYとIYが着ている女給服姿も相まって、古き良き純喫茶の雰囲気味わ
いたい人や挙句に女給服目当ての輩まで大挙して訪れる始末…

HGは「人手が足りん！」とこぼしていたが、HYとIYから「それ以前に、准尉の手

が遅い！」と突っ込みを入れられた。

●エージェントへの道、目指せ！特別銃器携帯・使用許可証取得

白山亭の休業日に、HGはHYとIYに特別銃器携帯・使用許可証の取得について話した。

「特別銃器携帯・使用許可証を取得するには、国家試験に合格しなければね。試験は年4回、場所は各県領地の指定試験場で、ここB県領地はY市銃砲試験場と言う立派な施設がある」

「そうなんですね」

「試験は、筆記・射撃実技・取扱いならびに分解掃除実技がある。筆記は銃器系の火薬系の法律から、射撃実技はそのまんま銃で的を撃つ技術ならびに銃の取扱いをチェックされる。

分解掃除実技は、射撃実技で使用した銃を分解掃除する技術。それが、銃器によりカテゴリーが決められている。カテゴリーと言うのは、拳銃・短機関銃・小銃・突撃銃・散弾銃・軽機銃・口径20ミリ未満の重機関銃・擲弾筒（グレネードランチャー）……と言うように分かれている。例えば俺の愛銃は、38口径の自動拳銃だが、この場合、許可証の使用銃器種別のマークの拳銃の欄に『○』が入る事で拳銃の使用が可能となる」

「准尉、質問」

「なんだIY」

「その試験は、一度に拳銃なら拳銃しか受けられないのですか？」

「なるほど……まず、試験全体について説明すると、午前の試験は筆記。午後は射撃実技・取扱いと分解掃除実技になる。午後の試験は、銃器種別を選択する申告制なので、一度の試験で拳銃と突撃銃と小銃と散弾銃と擲弾筒なんて組み合わせができる」

「くえー」

「また、午前の筆記試験は合格すれば全部のカテゴリーで3年間有効だから、次回から3年間は午後の試験だけになる。だから、午前の筆記試験にまず合格しないとね。午後の射撃実

技・取扱いと分解掃除実技は、さっきの銃器の種類別になるが、試験官と一対一になるので、その時に受験者が選択した銃器を使用する。拳銃なら、課題の拳銃と弾丸と工具が用意されている。その一丁を制限時間30分以内で終わらせる。それを申告した銃器の種別の数だけ繰り返し返すことになる」

「…」

「筆記試験は、さっき言ったように法律や銃器についての知識が問われる。90点が合格ライン。午後の試験は、試験官と一対一の対決…みたいなものだが、まず射撃は銃器によってレンジ（射撃場での的から距離）が異なるので、短機関銃・軽機関銃・口径20ミリ未満の重機関銃・擲弾筒など一部例外があり一概に言えんが、的の中心点に全弾命中させること」

「そんな…」

「その前に試射が各3発可能だから、その間にサイト（銃についている的を狙うための装置）を調整する…ここで肝心なのは、その時の銃器の扱い、弾丸の扱い、更に試射の仕方等を厳しくチェックされる。全部減点方式…そのため、試射をしている最中に試験が終了する場合が多いね」

「えっ？」

「受験者が申告した試験課題の銃器を試験場のガンラックから持ち出す時から試験が始まっていると言う事を知らない受験者が多くてね、ガンラックに行く前に、試験官に持ち出し許可を得ないとか、ガンラックに触れる時点でガンラックに備え付けられている鍵の開閉…特に扉を閉めた時に鍵をロックし忘れるとかね、ガンラックから持ち出した銃器の持ち方とかね。基本はガンラックから持ち歩く前に銃のチャンバー（薬室）が常に空の状態で撃てできないようになってる事。また、弾丸を持つてくるときにも安全を重視した取り扱いをしていないとかね。シューティングレンジに入っても、入る前の安全確認とか事前の的の確認をしないとか、その時に銃器を置く場所と弾丸の置く場所をチェックされたり、弾を込

める前に既に銃器の中に弾丸が残っていないか確認して、もしあったら試験官に申告して処理するなんてね…それが全部できていないと、撃つ前から試験官に『はい、ご苦労様です。お帰り下さい』と言われて、その場で不合格」

「ひゃー」

「それらは、午前の筆記試験でも銃器の取扱いについて問われる問題があるから、知識だけではなく、実戦でもできている事を見られる」

「…」

「繰り返すけど、課題の銃器をガンラックから持ち出した時点から取扱い・射撃・分解掃除してガンラックに戻すまでの一連の作業になる。従って分解掃除は、射撃で使用した銃器を使用する事になるので、構造をよく知らない銃器を使用すると、とんでもないことになる。

分解掃除は、専用の作業台でまずテイクダウン（通常のメンテナンス状態）状態にして、バレルとチャンバーに清掃工具を使える状態にして、試験官に申告。試験官がOKを出したら、全部分解…それができた時点でまた試験官に申告。この時試験官はなにも言わないでOKを出すので注意！…まだ分解できるパーツがあるかもしれない…で、全部組み上げたら、その場にスプリング・ネジ1個残らないこと…後はガンラックに戻しておしまい」

「ひゃー」

「あのう…准尉、なんでそんな細かい事知ってるんですか？」

とHYが訊ねると、

「ああ…それはね、午後の試験に使用した銃器の掃除とか分解時に間違った部品付けられたりとか、組み上げるときにネジが余ったりする銃器を預かって、また使えるようにするのは俺達ガンズミスが試験場から請け負う仕事の一つなんでね…それと、俺、試験官やつてるから」

「あー、それで」

「だから、ガンスミスの仕事で日常的に銃器の手入れなどをしていれば、いろんな銃器に触れることができるし、各銃器の取扱説明書を見ることができて、完全に分解する事ができるし、また組み上げる事ができるのだ」

「…例えばね」

H Gは部屋の隅にあるガンラックから愛銃を持ち出す。その時、H Gは愛銃にマガジン（弾倉）が入っていないことを確認し、スライドを引く、スライドがスライドストップと言う安全装置に引っかかって、内部にあるバネの力で前進しないことを確認、また愛銃の安全装置が掛かっていることを確認して、スライドを持ってH Y達の前に戻る。

H YとI YはH Gがさりげなく行っている動作の一つ一つが試験でチェックされることを知った。

「この後、シューティングレンジで射撃した後、またこの状態にして、まずはテイクダウン状態にする」

H Gは愛銃：それは現在のポリマーフレームオート（拳銃のスライド部分とバレル（銃身）・スプリング等の部品以外を強化プラスチックで作つてある）ではなくて、金属削り出しの精密加工部品の組み合わせで作られていて、手に握る部分には木が使われているやや古い拳銃ではあるが、現代の拳銃で使われている安全機能の最低限がついている。H Gはスライドを握ってスライドを更に引き、テイクダウン兼スライドストップレバーをスライドストップ位置から更に回すとテイクダウン位置になり、スライドとフレームが別れた。

「この状態がテイクダウン状態：この状態でフレームに固定されているチャンバー（薬室）とバレル（チャンバーはバレルの中に作られている）を掃除する。これは二人とも民兵時代に作業でやっているから分かるよね。この状態で清掃具を使わないと減点されるから注意！ここまでにしたら、一旦試験官に申告」

「はー」

「ここから大変」

H Gはガンラックの引き出しから工具箱を持ってきて、ドライバーや六角レンチを使って更に愛銃の各部分をパーツ毎に分解する…その時間約5分。

「ここまでが、完全分解状態」

と言って、H Gは自分の愛銃を完全に部品状態にまで分解した。

「この位にまで分解する事が求められる。H Yはここまで分解した事はないだろう？」

「はい」

「I YはS Sの下に居た時、ここまで分解した事ある？」

「…いえ、そこまでは…」

「あいつ（S S）は、そこまで部下に教えてやらせないんだ…S Sならこれくらい簡単にできるのにね…あれは人に教えることができん奴だからなあ…教えてやらせれば、自分の仕事が楽になるのに」

H Gは前の会社で仲の悪い後方支援部隊のS Sの事を言った。H YとI YはS Sの事を知っているし、ましてやI YはS Sの部下だった。

「まっ、いいかあ！で、この時点で試験官に『完全に分解しました』と申告する。試験官がOKを出せばこれから組み上げる」

「准尉、この時点で分解しきれていないパーツがあってもOKが出るのですよね」

「そう…但し、部品によつてはメーカーで『これ以上分解しないこと』と取扱説明書に書いてある場合は、手を付けちゃ駄目。付けたら減点」

「ひえ」

「分解試験時に取扱説明書を見ちゃ当然駄目ですよ…准尉」

「とーぜん。頭に入れといてね…逆に言うと、使い慣れた銃器をガンラックから持ってくればいいのさ…あればね…試験に使用する銃器はガンラックに数丁あるから」

「…なんだ、少し安心した」

「で、この状態から組み上げる」

H Gは先程の分解の逆の手順でテキパキと拳銃を組み上げる。二人共その速さについていけなかった。そして、最後フレームにスライドを滑らすように差し込み、テイクダウン兼スライドストップのレバーをテイクダウン位置から元に戻して

「この状態にして『組み上がりました』と申告する。後は試験官が作業台に部品が残っていないか、また組み上げた銃器は元通りになっているかを確認。その後はガンラックに戻して、申告した1つの銃器の試験は終了…これを30分以内に終わらせる。タイムオーバーはペナルティとして減点対象」

「「うわっ」」

●H Gの過去

I Yはガンスミスの修行のため、“男屋”でH Gの友人でガンスミスのS Kから指導を受けていた。

「よし、こんなところだ…うまいぞI Y」

「ありがとうございます」

「休憩しよう」

「はい」

ガンスミスは“男屋”の一階にある。“男屋”と言うのはH GやI Y達が暮らしている“母屋”に対して付けられた別棟の渾名で、母屋がH Gの曾祖母、祖母家族が暮らす家で、他に、かつては白山亭と碓屋の女給兼娼婦の住み込む女達の家である。ミルクホール時代の白山亭には当然男性の住み込み従業員も居て、その人達は男屋に住んでいた。その中にはかつてH Gの祖父が白山亭経営者の曾祖母の娘である祖母との結婚前、男屋に住み込みで隣

接するボイラー室でボイラーマンをしていた。

S Kが男屋に引越してきて、H Gの祖父の作ったボイラーのマニュアルを見ながらボイラーを再度動かすことができたので、白山亭の調理場に供給するお湯と母屋の風呂が24時間使えるようになった。

母屋の風呂の他に、都市ガスを使うのが男屋にあり、ボイラーが使えるようになる以前はH GとH M、H Y達が使用していた。

H Gは男屋の1階を手入れしてガンスミスの工場とし、機械類を入れていた。

S KとI Yは男屋の工場を出て、母屋の縁側に行く。そこには、お湯の入ったポットと盆の上にお茶の道具が一式置いてある。

I Yはお茶を淹れて、S Kに渡す

「おお、ありがとう」

と、S Kが言うのと、

「軍曹（S Kの渾名、S Kの皇国政府軍時代の最終階級は軍曹）さんは准尉とは徴兵時代一緒だったんですか？」

「そうだよ、俺とあいつとは徴兵時期が1年違うけど、実は同じ年なんだ。あいつは大学4年で卒業して、俺は1年留年した。配属先が機甲師団の特殊車両試験部隊だね」

「特殊車両？」

「うん、新しく開発されたり、改良された素材や武器や機能・機構を組み込んだ戦車や装甲車等の軍用車両のテスト部隊で、殆ど民間の兵器開発企業へ出向状態。あいつが搭載機器担当で俺がエンジン・足回り担当」

「搭載機器と言うのは？」

「搭載機器と言うのは、通信機や火器管制装置等の電気・電子機器一式：奴は大学で工学部の電子・電気工学の学部卒だから：ちなみに、俺は機械工学。それで、試験対象の装甲車や戦車や自走砲で荒地地を走りながら機銃や大砲を撃ったり、ひっくり返りような急斜面で砲とかぶっ放したりしてね：あるとき、改良された足回りを付けた輸送車に急ごしらえの対戦車砲積んだ車両で奴が大砲撃ったら、車両が横転して二人して投げ出されて、その後大砲の撃つ角度とか車両の足回り以前に車体の安定保持とかで言い合いになったっけ…」

S Kは遠い目をして笑った。

「そうだったんですか：それで准尉は特別銃器携帯・使用許可証が限定解除なんですね」

「そうだね、奴は任務で大砲打つ必要があったから、職務上必要なんで取っていたね。俺は、機関砲までだけど：そういや奴は対戦車誘導ミサイルも撃ってたな：あれは、どの免許に該当するのだろう？」

とS Kは言った。

「ミッ、ミサイル！」

I Yはギョツとした。S KはI Yの反応にお構いなしに

「その後ある時、前線に特殊車両試験部隊が一時投入されて俺とH Gも参戦した時に、俺とH Gが乗る車両が被弾して、俺が足を負傷して動けないのをH Gが担いで後方まで連れて行ってくれたんだ：おかげで片足は不自由になったが、切り落とさなくて済んだ。そのため、奴より早く傷痍軍人として退役した。奴は俺の恩人だよ」

「そうですか」

と言って、I Yは時計を見た。

「あら：もうこんな時間…、私そろそろ、お店（白山亭）に行かないと…」

「おっ、もうそんな時間か…」

S Kも時計を見ながら言った。

「お嬢（S Kが付けたI Yのあだ名）、風呂入って着替えな」

「はい…、私達が風呂に入れるのも軍曹さんのおかげですね」

「そうだよ。おれのお陰だ」

S Kは笑った。

●めんどせー

S KとI Yが母屋の縁側で会話していた頃…

「こんにちはー」

と白山亭のドアを開けて2人の女性が入って来た。

「いらつしゃいませ…えっT T!…とT Y」

来客応対に出たH Yが驚く。

「あら…H Y!」

T Tは驚いた。「なんでここにH Yが居るの?」と一瞬戸惑ったが、「(後で、本人や准尉に聞きましょ…それよりもH Y…可愛いー!)」と思い直して

「お久しぶり…可愛い格好してー」

とT Tはにやけて言う。

「どうしたの?」

H Yが上目ずかい（T Tは高身長なので、これが低身長のH Yの作戦と言うより、そのまんま）で訊ねると、T Tは無然として、

「あらあ…それは私のセリフ…なんでH Yがここにいるの?」

と言った。確かに、H YとT TはO県領地の漁港で別れていた（「巻き込まれ親父の反撃」参照）…H YがF県領地の隣のS県領地に実家があるのをT Tは知っている（「巻き込まれ

親父の撤退」参照）。なので、T TはH GがF県領地の事件を解決したので、H YはF県領

地に置いてある自分の軽ワゴン車で実家に帰ったと思っていた。

「そっ、それは…」

H Yが口ごもる。H Yの態度を見て、T Tは伏し目がちに

「H Y、話したくないのなら、今は聞かないわ…あなたが話したくなったら教えて頂戴」

と言って、立ちすくむH Yの横からT TとT Yが店の中に入る。身動きしないH Yに

「H Y、席に案内してくれるかしらあー」

とT Tが言うと、H Yは慌てて

「こちらへどうぞ」

とT TとT Yを席に案内する。

その声を聞いてバーカウンターでコーヒーを入れていたH Gの手が止まる。H Gが見上げるとバーカウンター越しにT Tは手を振っていて、T Yは頭を下げていた。

「やあT T、T Yも、いらっしやい」

H Gはにこやかにバーカウンターの席を勧める。T TとT Yが腰掛けると

「准尉がこの店を始めたと教えてくれたので、遊びに来ました。開店おめでとうございます」とT Tが笑顔で言った。T Yも「おめでとうございます」と続けて言った。

「ありがとうT T、祖母の店を再開させたばかりで、まだ新米のマスターだけどね」

と言って、H Gはフロア担当の制服の襟を正した。

「そうですか、准尉の格好は貫禄がありますよ」

「おほめ頂き、ありがとうございます」

と言って、お互い笑いあった。

「なににする？と言っても、まだメニューが少ないけどね…ハハハ」

H Gが照れ笑いしながら、メニューを出す。

「私は、白山亭オリジナルコーヒーを…T Yは？」

「あつ、私も同じコーヒーをお願いします」

「はい、ちょっと待ってね…今、先に注文したお客さんの分、できてからね」

「あら…准尉、ハンドドリップなんですか？」

「本当は、ドリップマシンでも入れようかと思っているのだけどね」

「後ろに、サイフォンとか色々器具がありますが…」

「まだ、使いこなせてない…」

H Gは情けない顔をした。そう言いつつ、先に注文のあったコーヒーを淹れると、

「H Y、できたよ」

「はい」

H Gがカウンターに出したコーヒーカップをH Yがトレイに乗せて窓際のカウンターに居る客に持つていく。その姿を見送っていたT TとT Y

「あのー、なんで彼女がここに？」

T Tが訊ねると、H Gは臆することなく

「F県領地の事件後、I Yと共に俺に押しかけ弟子入り…」

と言って、肩をすくめた。

「ええっ？」

T Tは呆れたといった顔をした。

「ホントですか？I Yも？」

T YはI Yの姿を探すが、店の中にはいなかった。

「あれ？T Y、I Yの辞めた理由知らんの？」

とH Gは訊ねた。F県領地の事件では、T YとI Yはツーマンセルの相方であり、コミュニケーションをしていると思っていた…後に、H Gは知ることになるが、当時のI Yの暗さか

ら、I YがT Yと殆どコミュニケーションを取っていなかった事を知った。

「いや…IF隊長から、F県領地の事件でメンタルやられたとかで退職したとしか…」

H GはI FがI Yについて庇っている事について感謝した。

「そうなんだよ…おかげで、あいつらを養うために、この店再建する羽目になった」

「そうですか…なんといいますか…」

T Tは意外そうな顔をした「(あのH Yがねえ…会社(民兵会社)に居た頃も、なにか隠していて表に出さない子だったけど…)」。

「准尉、I Yも居ると言いましたが、どこに？」

とT Yが再び訊ねた。

「あれ(I Y)は、今、この裏にある工場で俺の友人の助手として作業している」

H Gは無意識に親指で白山亭の店の裏にある工場(男屋)を指す。

「工場？…助手？？」

T Yが首を傾げてH Gに質問する。

「うん、俺のもう一つの稼業であるガンスミスの工場が裏にあって、昔の軍時代のガンスミス仲間の友人と正式にガンスミスを始めた。I Yは今そこで友人の指導を受けている…もう少ししたら、こっちの店に入る予定だよ」

それを聞いて、T Tは

「あら…I Yの制服(女給服)姿も見てみたいわぁ」

とはしゃいで言った。

H Gが自らハンドドリップで淹れるコーヒーについて、あれこれ言いながら、T TとT Yと談笑していた。

その会話の中で、T Tがサイフォンを扱えるのをH Gは知った。

やがて、女給服に着替えたI Yが店に入ってくる。バーカウンター横の通用口のドアを開け、スカートを持って会釈をした。これは、I Yの育ちと品の良さから自然に出た仕草で、以後彼女を真似る者が続出する。

「I Y入りまーす…って、あれ？T Y先輩！と…えーと、T Tさん」

I YはT TとT Yを指さしながら

「あら、よく覚えていたわね、I Y…制服可愛いわね」

と、T TがI Yを褒めると

「ありがとうございます。いらっしやいませ先輩方」

と言って、スカートを持って挨拶した。こういうところは、I Yはかつてお嬢様であったのでポーズが決まっている。

「I Y久しぶりー、よく似合ってるね」

「ありがとうございます、T Y先輩」

「ところで…T TとT Yとは珍しい組み合わせだね」

改めてH GがT Tに質問すると、T Tは深刻そうな表情になり、

「…実は、T Yから相談を受けて、ここに来ました」

「ふーん、T Yから相談ね…何だい？」

「実は…准尉。私会社を辞めまして…」

T Y本人が打ち明けた。

「ふんふん」

「それで、T Tさんに相談したら、准尉の所に行こうと誘われまして…」

T Yの言葉にH Gは嫌な予感がした。H Gは

「T Yは先輩のH YはともかくT Tの事、知ってたっけ？」

と訊ねると、

「わたしが新兵時代の訓練で当時准尉のアシスタントをしていたH Y先輩とT Tさん（Tは中途入社です。作者注）にはお世話になりました」

「ふーん」

「それで、F県領地の事件でT TさんとH Y先輩に再会しまして、昔話ついでに連絡先交換しました」

「あっそ！」

H Gは素っ気なく相槌を打ち、「（女子のコミュニティは侮れんな…）」と思った。

「でT Tさんが、准尉が商売を始めたので一緒に行こうと、誘われました…」

「うん…T Tにはこの店の話はしていたけど…」

H Gは「（今、2度この事言ったなあ…そろそろ…来るかなあ？）」と覚悟していると、

T Tが

「で、私達、ここで雇ってくださいませんか？」

と言ったので、H Gは「（あれ？）」と困惑した。H Gの想像ではT TがT Yをここ（白山亭）で雇うようにお願いするかと思ったが、T Tが『私達』と言ったので、

「私達？」

と驚いて言った。それを聞いてI Yも驚く。

「ええっ？」

と言うI Yの言葉にH Yは慌ててバーカウンターに来た。

H Gは混乱しつつも、

「今…『私達』と言ったな」

「はい」

T Tはシレっと言った。

「それは…あのなんだな…お前さん達をここで雇えと？」

「そうですよ」

TTは相変わらず、すまし顔で言うが、TYは恐縮していた。

「…TT、TYを俺が雇うと言うのはともかく…お前さん、家庭は？」

とHGがTTに訊ねると、

「准尉！それは、TYは雇ってもよいと言う事ですネ」

TTが薄笑いをして言う…HGは「(しまった！まんまとTTの策略に乗ってしまった)」
と思った。

「うっ…うーむ、そうなるな…」

「それじゃ、TYの件は決まりですね…私は、パートでどうでしょうか？家は同じ市内ですし、子供も大きくなって手がからなくなり、逆にお金が掛かるようになったので、私も稼がないといけないので…そりゃ、准尉は店を始めたばかりですから、まだお店の経営は不安定でしょうから、TYはHYとIY同様弟子入りと言う事で…私は小遣い程度のお金を貰えればいいので…」

なし崩し的にTTに押し込まれた。HGは「(さて困ったぞ！)」と後頭部を撫でた。やがて冷静になって、

「TY」

「はい」

「お前が会社(民兵会社)を辞めた理由を聞かせてくれ」

「はい…実は、IYが辞めた後、わたしに風当たりが強くなりました…まあ元々あの会社はわたしの評価が低いので、いずれ辞めるつもりでいましたが…」

「TY先輩…ごめんなさい」

IYが頭を下げる。TYはIYに向かって

「別にあんたのせいじゃないよ…」

とIYの肩に手を乗せた。

「なーる（察し）」

HGはIF本人からF県領地の事件でIYとTYの事について、2人はIFの命令でO県領地に一旦渡り、本部と連絡を取り、本部の指示に従ったのが、本部ではなぜか「TYとIYはIFの命令に違反した」と社長に報告されているとの話を聞いて、HGは「IFは彼女なりに2人を庇ったと思うが、あの日和見保身内密主義の上層部達が保身の為、今度はTYを犠牲にしたんだろうなあ…」と思った。

TYが話を続けようとしたので

「わーった、そこまで！」

HGは手を挙げてTYを制した。そして

「俺は、お前が新兵時代から他の奴ら（TYの同期）より能力があると視ていた…そして、学生時代に苦労したこともな！」

と言った。HGは新兵時代のTYと個人面談し、TYの家の事…実家が先祖代々の軍人の家系で、TYは皇国から佩刀の許可を貰っている…程の経歴についてTYから聞いていた。

「俺は、お前の能力をかつている…なので、HYとIY同様の扱いを強いるが、それで良いかね？」

TYはHGの話に躊躇したが、「はい、弟子扱いと言う事ですね？」と答えた。HGはニタリと笑いTYにウィンクした…（相手がIFだったら「気色悪！」と言われかねない（笑）。作者）

「そうだ…住み込み飯付き、ただし当面給与ナシ、そしていざお前の能力を遺憾なく発揮してもらおう」

「はい、それで構いません。よろしくお願いします！」

TYは頭を下げた。それをHYとIYが後ろから「よかったね」とTYを揺する。

「はあい、それでは私はあー？」

T Tが遠慮せず主張する。H G「(負けた…)」と思い。

「T T…ここ(白山亭)のフロア担当でどうだ？時給は、最初は今いるアルバイトと同額…慣れてくれば時給を上げること…」

「はい、それでいいです」

T Tは嬉々として答えた。H Gは

「あー、めんどくせー」

と言った。

それを聞いたT Tは「(やったね！)」と思い、H Yは「(これは…大変だ！『めんどくせー』で済むのだろうか？)」と突っ込みを入れていた。

● 2型改対戦車誘導ミサイル

その晩の食卓でI YはH GとS Kの前で、昼間S Kが言っていた対戦車誘導ミサイルについて聞いてみた。

「准尉」

「何だ？」

「准尉は昔、ミサイルを撃ったことがあるそうですね？」

H Gは「(ミサイル…？何のこと)」と思った。H Gがキョトンとしてなかなか答えないので、

I Yは

「軍曹(S K)さんから聞いたのですが…」

I YがS Kの名前を出したので、H G「(ああ…あれの事？)」と思い出し、隣にいるS Kを見て、

「おい、あれ話をしたのか？」

と聞いた。S Kは「うん、した」と頷く。向かいでI Yの隣で食事をしていたH Yは「ミサイル」と聞いて「(えっ? 准尉ってそんなにすごいモノ扱った事あるの?)」と思った。H Yが想像したのは、地対艦ミサイルとか地対地ミサイルとか弾道ミサイルとか戦術核ミサイル(皇国にはそんなもの、ありません。作者注)とか巡航ミサイルとか…大型のミサイルの発射ボタンを押すH Gを想像してワクワクしていた(…ってオイ! 作者)

「アレは…とんでもねえ代物だったよな」

H GはS Kに促すと、S Kは「そうだな」と返事した。H Yはそれを聞いて嬉々とした。

「昔、皇国政府軍の配属先が機甲師団の特殊車両試験部隊に居たことがあってね。その頃にS Kと知り合ったんだ」

S Kは頷く

「二人で装甲車や戦車等に乗せる試作兵器のテストをしていてね。おれが電装系、こいつ(S K)が車両系に分担してやっていたんだ…ある時、対戦車誘導ミサイルを車両に装備する為のテストを任せられて、まずは地上型の対戦車誘導ミサイルを使ってみる事にしたんだ」

H Gは、お茶を一口飲むと

「最初の一型対戦車誘導ミサイルってえのがあってね、それはミサイルを有線誘導するタイプで、ミサイルを発射したら目標まで手元のコントローラーで操縦して当てるというタイプだね。そう言うモノだから速度が遅い…確か時速200キロしか出なかったっけ? なあS K」

「うーん、野球選手の打球速度並みに目で追えたから、そんなものじゃないか?」

この時ようやくH Yは「対戦車ミサイルの話なのね…そりゃそうよね、准尉が扱うからね…」と今まで大きなミサイルを想像していた自分自身に突っ込みを入れていた。

「なので、ミサイルやロケットの類同様、発射時の噴射煙が盛大に上がって、敵から発見さ

れ易い。そこを目掛けて榴弾打ち込むとか機銃掃射すればミサイルを撃った相手を倒すことができる…撃った相手を倒せば、ミサイルはコントロールを失って自滅する。おまけにミサイル自体が遅いからミサイルに向かって同じことをすればミサイルを破壊する事ができる」

「そこで、ミサイルを車両に乗せて、撃つてすぐさま移動すれば、射手の安全が向上する。

問題は移動しながらミサイルのコントロールができるかと言う事…そのテストをしろと言われた」

とSKが続ける。

「その結果はどうなったのですか？」

とIYが訊ねる。

「ミサイル自体が遅いので、なんとかコントロールできるのだけど、ミサイル自体を撃ち落されて、使い物にならない」

「うんうん」とSKが頷く。

「で、次に開発中の二型対戦車誘導ミサイルを上官が借りてきてテストする事になった。二型は一型と違ってミサイルに赤外線誘導装置を付けていて、発射すれば、その方向の熱源向けて飛んでいくで、一型みたいにコントロールする事は無い…ないんだけど、赤外線誘導なので目標より大きな熱源…例えば発火信号弾とか手前で撃てば、そっちにミサイルが行ってしまう…」

それにSKが

「それで、的の手前で発火信号弾を撃った奴がこっちに撃ちやがって、おかげでミサイルがこっちにUターン…模擬弾頭じゃなきゃ二人とも車両と心中していたな」

「確かに…」

HGとSKは思い出し笑いをした。IYとHYはゾツとした。

「次に、開発中の二型改つていう対戦車誘導ミサイルをまた性懲りもなく上官が借りてきてテストする事になったな」

「そうそう…」とS Kが相槌をする。

「この二型改は、また有線誘導に戻っているけど、今度はミサイルの先端にカメラがついていて、それをモニターを見ながら操縦するタイプで、速度は一型の数倍の時速6〓700キロの速さ…そう…レシプロの戦闘機並みの速さ…ミサイルを途中で撃墜される可能性は各段に低くなつたけど、やはり発射時の噴射煙が盛大に上がって、敵から発見され易い。そこを目掛けて榴弾打ち込むとか機銃掃射すればミサイルを撃った相手を倒すことができる…と言う欠点はそのまま…」

「時速600キロなら、ミサイルも撃ち落せるのでは？」

H YがH Gに訊ねると、

「的が小さいのでね…直径200ミリの点が時速600キロでこっち向かって来ると、見づらいからよきれないよ…野球でも今では時速150キロで投げる投手が居るが、とても打てない。それを操縦するんだ。いやはや戦闘機乗りつてすごいなあ…と思うけどね。それを的に当たるまでスコープ見てるんだ…あまりいい気分ではないよ」

「准尉、それで？」

I Yが話を急かす。H Gは話を続けた、

「確かに地上に固定設置していれば、命中率は高いけど、車両に搭載して移動中に運転手の隣でスコープ見ながら操縦するんだ…」

と、H Gが言うと、S Kがその後を続けて、

「誘導の途中でミサイルが突然的の手前で落ちたんで、驚いて運転していた軽装甲車を止めて、こいつ（H G）を見たら、この野郎…車酔いしてゲロってやがんの…」

S Kが笑いながら言った。

「食事中に止めてください！おじさん達」

H Mがピシヤリと言った。

「ああ…ゴメンH M…で結果は移動しながらのミサイル誘導は無理って事になったが、装甲車には搭載したな…あれは二型の赤外線誘導と二型改の有線誘導のいいところりで、あの程度赤外線誘導で飛ばして、途中途中に手で操縦する事にしたらいいけど」

「ああ…今はレーザーで機械が自動的に追尾してミサイルを誘導したり、ミサイル自体が自律して的方向に向かっていくから、兵器の進化って凄いものだ。あの頃（約30年以上前）はワイヤー有線が最先端だったものなあ…」

と、H Gがしみじみ言うのと、

「それですね…ミサイルを撃つのに、特別銃器携帯・使用許可証は必要あるんですか？」

I YがH Gに質問すると、

「エッ？ミサイルは特別銃器携帯・使用許可証の範疇じゃないよ…だって一般人がミサイル携帯するかあ？…あれは軍務」

「ああ、そうですか…」

と言つて、I Yは納得した。

●エピソード

数日後、T Yが帝都のアパートから荷物を持って白山亭に引っ越して来た。

H Yが対応して、母屋の2階の部屋（H YとI Yの隣室）に案内し、荷物を運び入れた。
その時H Yが

「T Y…その…あなた “見える人”？」

と聞いた。聞かれたT Yは訳が分からず。

「H Y先輩…なんですか？その “見える人” って？」

H YはT Yにこの霊達の話をした。それを聞いてT Yは動じることなく

「…そういう意味ですか…それならわたしは『視えない人』ですね」

「…そうなの？」

H Yは同類が出来た事に安心したが、

「はい、わたしの実家は古くから皇王家に仕える軍人の一族なので、ご先祖様には時の皇王様に仇なす一族や魍魎魍魎を退治した人達が居ます」

「そーなの？」

H YはT Yの家の事を始めて知って驚いた。

「ですので、ここに皇王家から拝領した太刀を守り刀に持ってきています」

と言って、T Yは傍らに置いてある風呂敷を解き長物が入る箱を見せた。箱には『下賜太刀』と書かれていた。

「ま、これがあれば悪霊の類は寄ってこないでしょう…」

と言って、T Yはニタリと笑った。それを聞いてH Yはビビった。

のちにI Yが言うには、母屋の霊達はT Yの守り刀にビビってT Yには近寄らないようにしているとの事…

「ええーっ、わたしだけ守ってくれるモノがなーい！」

H Yは悲鳴を上げたが、I Yが

「大丈夫ですよ、ここの人達（霊達の事）は悪意ありませんし、それに准尉が居ますから」と勇気づけた。

「…I Y…それ、ぜんぜんフォローになってないから！」

T Yの荷物を部屋に運び入れた後、H Gの部屋に正式に挨拶に来たT YとついできたH

YとI Y…

「准尉、今日からお世話になります」

「TYよく来た。当面は白山亭の女給の仕事がメイン。その合間に工場でSKに付いてガン
スミスの手伝い」

「はい」

「エージェント派遣業務は、まだまだ先だね…3人供、特別銃器携帯・使用許可証を早く取得する事だね…特にTY…皇国から佩刀の許可を貰っていても、銃器の携帯許可は許されてないでしょ」

「」「はい」

「巻き込まれ親父の鎮魂 Ⅱ完Ⅱ」